
黒魔術師松本沙耶香 客船篇

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒魔術師松本沙耶香 客船篇

【Nコード】

N1167K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

豪華客船の中での多くの問題の解決を依頼された松本沙耶香。その解決しなければならぬ問題とは。今回は人間模様を美女、美少女達を籠絡しつつ絢爛な客船を舞台として沙耶香が舞います。

第一章

黒魔術師松本沙耶香 客船篇

「それが今回の依頼なのね」

「はい」

こう黒衣の女に話していた。

「その通りです」

「そうなの」

ここまで聞いてであった。その黒衣の女は見れば切れ長の奥二重の目を持っている。そしてその目の色は黒檀を思わせる黒で何処か妖しい輝きを放っていた。

その面長の顔は白くまるで雪の様である。引き締まった唇は紅色であり小さい。鼻は高く整った形をしている。

その長い黒髪を後ろで団子にしてまとめている。その為その髪は一見すると短く見える。そしてその髪は絹を思わせるしなやかさと艶を見せていた。

黒いスーツの中から白いブラウスと赤いネクタイが見える。長身に豊かな身体をその中に包んでいる。その美女が話す男の向かい側に座りそのうえで話を聞いているのである。

その美女はだ。話を聞いてから述べたのだった。

「そうね」

「引き受けて下さいますか？」

「面白い話ね」

こう言ってきたのである。

「少なくともその場所ね」

「面白いですか」

「今まで色々な場所を回ってきたけれど」

「そこはないですか」

「船旅は好きよ」

女は微笑んでそれはというのである。

「けれどね。そうした事件の解決として乗り込むのはね」

「それはないと」

「縁だから」

「ここでもこんな言葉も出て来た。」

「事件を解決するその場所もね」

「それも縁ですか」

「そうよ、縁よ」

まさにそうだというのである。

「それもね」

「そうですか。そういうものなのですね」

「人と人との出会いと同じよ」

ここで、であった。女は妖しい笑みを浮かべてきた。妖艶な、しかもそこには思わせぶりなものも含んだ、そんな笑みを相手に向けてきてそのうえで言うのである。

「それはね。縁があれば出会い」

「縁がなければですか」

「永遠に出会うことはない」

まさにそうだと話すのである。

「永遠にね」

「それはよく言われていますが」

「だからよ。縁がなければどうしようもないわ」

また言う美女だった。笑みはその妖しく思わせぶりなままだ。その笑みで語るのである。

「そういうものだからね」

「そしてそれは依頼先もですか」

「そういうことよ。それでその船だけれど」

話は依頼の方向に移った。

「かなり豪華な客船なのね」

「我が国は今までそうした客船の建造はお世辞にも長けているとは

「言えませんでした」

男はここで少し残念そうに言うのだった。

「ブルジョワとか貴族とかそういう批判が出て来ますので」

「階級社会、いえ格差社会ね」

「はい、そうした言葉も出まして」

「マルクスね」

美女は短いがそれだけでそうした考えを批判したのだった。一蹴という感じである。

「私はその考えはね」

「お嫌いですか」

「あれは何もかもがわかっていない人間が言って考えるものよ」
そうしたものだということである。

「そして」

「そして」

「マルクス主義者は私を説明できないわ」
彼女をだということである。

「決してね」

「そうですね。貴女は」

男はここで話すのであった。その彼女のことをである。

「松本沙耶香」

「ええ」

名前を言われてであった。口元と目元を微かに笑わせたのである。その笑みもやはり妖しいものである。

第二章

「我が国でも有数の魔術師ですから」

「黒魔術師よ」

その魔術師というのは少し訂正させてきた。魔術は魔術でも黒魔術であるというのである。彼女の魔術はだ。

「私はね」

「そうでしたね。貴女の魔術はでしたね」

「私の魔術は黒魔術」

思わせぶりな笑みはさらに深いものになった。そしてその妖艶さもだ。彼女の美貌は陽の世界にあるものではなかった。夜の世界にあるものであった。

「それだから」

「黒魔術ですか」

「黒魔術は闇の魔術」

その漆黒の服の中で言う言葉はであった。何よりも説得力があった。闇の中からの言葉そのものだからである。

「そしてその手段は決して美しいとは限らないもの」

「闇の世界のものだからですか」

「闇もまた真理の中にあるもの」

今度はこう言うのであった。

「決して悪ではないものだけだね」

「闇の中にあっても悪ではないのですか」

「そうよ、ただし善でもない」

それでもないというのである。

「光も同じようにね」

「つまり白魔術師でも善とは限らないのですね」

男は話を聞いてそれを逆説的に述べたのであった。

「そうなるものだ」と

「その通りよ。もっとも私は自分を善だと言うつもりもないわ」
「それもないのですか」

「私は背徳には興味はあるけれど」
「ここでまた笑うのであった。」

「善には興味はないのよ」

「そういうことですか」

「そうよ。それじゃあ」

沙耶香はまた言うのであった。

「私についてはそういうことでいいわね」

「はい」

男もまたそれでいいというのであった。そのうえでまた言ってきた。

「この仕事の解決には関係ありませんので」

「人格や性格はなのね」

「まずは事件の解決です」

まさにそれだというのだ。

「私が依頼したいのはです」

「それね」

「その客船の中で起こることです」

彼の話はここで大きく限定された。それからだというのだ。

「それですが」

「それなのですか」

「はい、それでは」

こうしてであった。沙耶香は事件の解決を依頼された。こうして彼女は仕事場所に向かうのだった。そこはその客船だった。

横浜の港に停泊している。かなり巨大な船であった。

「大きいわね」

沙耶香はその客船の前に来てまずはこう言った。まさに見上げるばかりであった。白く場所によって黄金も見える。

「この船は」

「さて、それでなのですが」

「私の部屋はあるのかしら」

「あります」

隣にはあの仕事を依頼してきた男がいた。

「もう用意してあります」

「そう、有り難う」

「ただ」

しかしであった。ここで彼は言うのだった。

「あれで宜しいのですか？」

「ええ、あれでいいのよ」

まさにいいというのである。

「私のお金でね。泊まるのだし」

「部屋でしたらその程度のお金は用意してありましたが」

「部屋位自分で選ぶわ」

「こう言うだけである。」

「それも」

「ロイヤルスイートですか」

「ええ、それよ」

まさにそれだというのである。

第三章

「私はそこに泊まりたいから」

「しかし」

またここで言う男だった。その顔は怪訝なまみである。

「それでも仕事を依頼したのはこちらですから部屋のお金は」

「安心して。スイートにしろロイヤルスイートにしろ」

どちらもだというのだ。

「私は自分の楽しみで泊まるのだから」

「だからですか」

「そのお金は自分で出すわ」

あくまでそうするというのである。

「そういうことでね」

「左様ですか」

「それに私は」

沙耶香はさらに言ってきた。

「お金には困っていないから」

「ははは、そうですね」

それについてはであった。彼も知っていた。それは何故かという
とである。

「それは」

「今回の仕事でもね」

「こうした仕事の報酬は法外ですからね」

「だからよ。お金には困っていないわ」

こう話すのだった。

「だからね」

「そうですね。それでは」

「ええ、それで」

「御武運をお祈りします」

「その言葉は訂正してもらえるかしら」

男の今の言葉にはその妖しい微笑で返すのだった。

「それはね」

「といいますと」

「シャンパンを用意しています」

沙耶香がここで言う言葉はこれであった。

「こう言ってくれるかしら」

「シャンパンをですか」

「私には敗北とか失敗とかいう言葉はないのよ」

沙耶香の自信に満ちた言葉だった。

「だからよ」

「それでなのですか」

「だからね」

シャンパンだというのである。

「それで御願いできるかしら」

「そうですか。それでは」

「シャンパンをね」

「いえ、ここは趣向を変えましょう」

ところがであった。ここで彼は屈託のない笑顔を向けてきた。そうしてそのうえでこんなことを言ってきたのである。

「ロマネコンティでどうでしょうか」

「あら、そちらなのね」

「好みによってはトカイでも」

欧州の王侯貴族がこの上なく愛した極上のワインである。彼はシャンパンの代わりにロマネコンティとこれを出してみせたのだ。

「それでどうでしょうか」

「悪くはないわね」

それを聞いて実際に目を細めさせる沙耶香であった。そのうえでこんなことを言ってきたのであった。

「ただ。フランスもいいけれど」

「フランスも、ですか」

「日本もいいわね」

ここでは祖国を話に出してきたのである。

「それだと」

「日本もですか」

「この船は日本の船だったわね」

「はい」

それはその通りだという。仕事を依頼する時に話したことでもある。

そうしてだ。さらに話すのであった。

「あのクイーンⅡエリザベス二世に匹敵します」

「あの豪華客船よりもね」

「そうです」

「それでは余計に」

微笑みながらさらに言うのだった。

第四章

「ここは日本のワインもいいわね」

「日本のですか」

「甲州ワインがいいわね」

沙耶香がここで選んだワインはこれであった。

「ここは」

「甲州ワインですか」

「ええ。それも好きなのよ」

「そうだというのである。」

「日本のワインだとね」

「日本のワインも飲まれるのですか」

「意外だったかしら」

「意外ではありません」

「それは否定する彼だった。」

「どんなワインでも飲まれると思いますので」

「そうなの」

「それでは」

さらに言う彼だった。

「それを用意しておきます」

「御願ひするわね。それをね」

「しかし」

ここで男はまた言ってきた。

「それでいいのですか」

「その甲州ワインでということね」

「はい、思ったより安いですね」

こう言うのだ。実際に甲州ワインはフランスの高級ワイン等と比べればかなり安い。彼はそれを根拠として問うているのだ。

「それでいいとは」

「ワインは値段ではないわ」

だが沙耶香は微笑んでこう述べるのだった。

「ワインだけでなく女性もね」

「女性もですか」

「男性もだけれど」

思わせぶりの笑みになる。ここでは男はおろか女を籠絡すること
も好む沙耶香らしい言葉だった。そのことを言うのである。

「値段では全てはわからないわ」

「実際に味わってみないとですか」

「甲州ワインは絶品よ」

そして今それをはっきりと言った。

「それもかなりね」

「かなりですか」

「そうよ。日本の船だしワインはそれにするわ」

「完全にわかりました」

「ではそういうことでね」

「ああ、そして」

ここで今度は男の方から思わせぶりに笑って言ってきたのであつ
た。

「一つ御聞きしたいのですが」

「何かしら」

「私についてはお尋ねしないのですね」

その笑みで沙耶香に言ってきたのである。

「そのことにつきましては」

「そのことにも安心していいわ」

沙耶香はその彼にその思わせぶりの笑みのまま述べてみせた。彼
女もまたその顔に思わせぶりの笑みを浮かべて返したのである。

「それもね」

「依頼主の身元は既に把握されているのですか」

「全てね。何故なら」

「何故なら？」

「私は黒魔術師よ」

それが根拠だというのだ。

「黒魔術師の魔術の中にはね」

「その中には」

「相手の心を読むことができるものもあるのよ」
こう彼に話すのだった。

「それを使ったのよ」

「そうだったのですか」

「それも相手に気付かれることもないようにね」
それもだというのだ。

「できるのよ」

「流石ですね。では私の依頼をそのまま」

「受けさせてもらうからここにいろのよ」

こう彼に述べた。

第五章

「それではね」

「御願います」

こうしたやり取りの後で客船の中に入った。客船の中は眩い淡いキャンドルを模した灯りでビロードの赤絨毯、それに白い磨き抜かれた壁がある。扉はそれぞれ大理石を思わせる造りで何もかもが豪勢なものだ。

沙耶香はその中を進みながらだ。自分を部屋に案内してくれている冥土に声をかけるのだった。

そのメイドは黒と白の服に白のボンネットを身に着けている。黒を基調とした服に白いフリルがある。ストッキングも見事な白だ。黒いショートヘアでまだ幼さの残る顔立ちの可愛らしい少女である。沙耶香は彼女に声をかけたのである。

「一つ聞きたいことがあるけれど」

「何でしょうか」

前を進んで部屋に案内していた彼女はここで沙耶香に顔を向けて応えてきた。

「何か気になったことでも」

「貴女のことよ」

口元を微笑まさせての言葉である。

「まず貴女の年齢は」

「十九です」

そうであると答えるのだった。

「今は十九歳です」

「そう、十九歳ね」

「高校を卒業してすぐにこの客船に雇ってもらいました」
自分の事情も話してきた。

「そして今ここにです」

「いるというのね」

「はい、そうなのですが」

「わかったわ」

ここまで聞いて満足した顔で頷いた沙耶香だった。

「それはね」

「そうですか」

「わかったわ。では部屋に着いたらね」

「まずはどうされますか？」

「ワインを御願いするわ」

最初はそれであつた。

「それからね」

「それから？」

「後で言うわ」

こう言うのだった。

「後でね」

「そうですか」

「後でね」

何を考えているのかは今と言わなかった。そのうえでそのロイヤルスイートに案内された。その部屋の中はというとだ。

これまた一際豪華であつた。天井にはシャンデリアがありその光で黄金に照らされている。絨毯は見事なアラベスク模様でありカーテンは絹であり白く輝いている。

そして装飾や見事な風景画が飾られテーブルと椅子は黒檀である。ソファーもベッドも大きくベッドには天幕すらある。沙耶香はその部屋の中に入ったのである。

その部屋の中に入るとであつた。またメイドに対して言うのであつた。

「ワインはね」

「どれでしょうか」

「トカイにするわ」

それだというのである。

「二本ね」

「わかりました。二本ですね」

「そうよ。それに」

注文を続けていく。

「そしてチーズもね」

「チーズは一体何を」

「カメンベール、フランス産を」

チーズはそれであった。

「後はソーセージを貰うわ」

「以上で宜しいでしょうか」

「実はまだあるのだけれど」

ここでもこんなことも言ってきた。

「それはね」

「それは」

「ワインを持って来てくれるから言うわ」

「そうですか。それでは」

こうしてこのメイドはまずはトカイとカメンベール、それにソーセージを持って来たのである。それをワゴンに乗せて持って来てからであった。

第六章

沙耶香はその彼女に対してだ。こう言ってきたのである。

「それではね」

「そのお申し付けですよね」

「そうよ。まず言っておくわ」

こう前置きしたうえで、であった。

「少し時間がかかるから」

「はい、わかりました」

メイドも彼女のその言葉に頷いた。

「それでは何なりと」

「貴女はね」

それまで座っていたソファから立ち上がりであった。彼女にさ
らに言ってきた。

「まだ何も知らないようね」

「何もとは？」

「そう、何も知らないというのもまた」

彼女の前に来てだ。その切れ長の目を細めさせていた。琥珀を思
わせるその瞳の光は妖しく誘う様に輝いている。

「いいものだから」

「知らないことをですか」

「知らないことを知っていく」

言いながらずっと姿を消した。彼女の前からだ。

「えっ!？」

「ここよ」

急に姿を消したので驚く彼女に対してだ。後ろから囁いた。見れ
ば沙耶香は彼女の真後ろにいた。そして耳元で囁いてきたのである。

「私はここにいるわ」

「何時の間に」

「さて、それでだけれど」

後ろから囁き続けるのだった。

「貴女はこれからね」

「これから？」

「私の相手をしてもらうわ」

「相手とは」

「こういうことよ」

白いエプロンの胸のところに後ろから手をやってである。その中に手を入れるのだった。そうしてそのうえで揉みしだきはじめてのだった。

「あっ、何を」

「何を？ここまでして何をもう何もないと思うけれど」

言葉に笑みをツ含ませながらそのうえで揉み続ける沙耶香だった。

「そうでしょ。これでわかったわね」

「貴女はまさか」

「そうよ。貴女をこの為に呼んだのよ」

右手で揉み左手で腰を前から絡め取っている。そのうえで耳元で囁いているのである。

「この為にね」

「そんな、こんな仕事は」

「これは仕事ではないわ」

沙耶香はそれは否定した。

「仕事ではね」

「じゃあ一体」

「楽しみよ」

それだというのである。

「これはね。楽しみなのよ」

「楽しみ・・・」

「そうよ。だから」

前にその上体を倒す彼女に合わせて己も身体を前に折ってだ。そ

のうえでさらに囁くのだった。彼女を何としても逃さないかのよう
にしていた。

「貴女もね」

「私も？」

「楽しむといいわ」

目を細めさせ声もそうさせていた。

「存分にね」

「けれど私は」

「女は嫌だというのかしら」

「こんなことをしたことはありません」

こう言って拒もうとするのだった。この様な状況でもだ。

「ですから」

「そう、だからこそなのよ」

「だから？」

「だからこそなのよ」

この言葉を繰り返してみせた。それは彼女の心に刻み込む為であ
る。

「こうしてはじめて知るのよ」

「女の人を」

「男は知ってるわよね」

胸を責めもう一方の手で身体に愛撫をしながら彼女に問うのだっ
た。

第七章

「そうね。男は」

「それは」

顔を赤くさせる。それが何よりの告白だった。

「そうですけれど」

「男もまたいいけれど」

そちらも知っている言葉だった。そしてそれを楽しんだことのあることを語る言葉でもあった。

「女もまたね」

「いいというのですか？」

「そうよ」

「あっ・・・」

今の言葉と共にであった。彼女のその耳を噛んだのだ。それで相手も思わず嬌声を漏らしてしあった。その刺激を受けてである。

「さあ。いいわね」

「けれど。私は」

「知ってしまえばどうということはないのよ」

その囁きは続く。

「だからね。このままね」

こう誘いであった。彼女をその天幕のベッドの中に入れてであった。若い肢体を思う存分堪能し楽しんだのであった。

それが終わってからだ。沙耶香はベッドから出て服を着ていた。黒いスーツを着なおしネクタイを締めている。ベッドの脇に立ちそうしていた。

その彼女にだ。あのメイドがベッドの中で声をかける。その中でうつ伏せになって顔だけを彼女に向けてそのうえで言うのであった。

「これが女の人なんですね」

「どうだったかしら」

「凄いです」

まずはこう感想を述べるのだった。

「こんなにもいいものだったなんて」

「男もいいけれど女もいいものね」

「やっとわかりました」

沙耶香の言ったそのことがだというのだ。

「その御言葉が」

「わかってくれればいいのよ」

その彼女に顔を向けて微笑んだ。既に服は着ている。

「それでね」

「はい・・・」

「それじゃあ」

沙耶香は彼女にさらに言ってきた。

「貴女はこれで仕事に戻るのね」

「そうします」

「それでは。またね」

「またですか」

「時間があればまたこうしましょう」

明らかな誘いの言葉を彼女にかけた。

「いいわね、それで」

「またして下さるのですね」

「そうよ。時間があればね」

彼女の方を見てそのうえで妖しく誘ったうえでの言葉であった。

「その時にね」

「それではまた」

メイドは沙耶香のその言葉を聞いて思わず上体を起こしてしまっていた。その時についてその小さめだが形のいい二つの白い胸が出てしまっていた。

その胸を見てもだ。沙耶香は言うのであった。

「いい胸だったわ」

「あっ・・・・・・・・」

「隠す必要はないわ」

彼女が慌てて胸を隠したのを見てくすりと笑って告げた。

「それは」

「ですが」

「二人でいる時は隠す必要はないわ」

彼女にかける言葉はそれだけではなかった。

「見せるものなのよ」

「そうですか」

「そうよ。形はいいし」

まずはその形を褒める。それから。

「その味もよかったわ」

「味もですか」

「柔らかく。それでいて」

触ったその感触についても話すのだった。

「乳首も味のいいものだったわ」

「ああした舐め方もあるんですね」

「女の感じる場所は女が一番よく知っているものよ」

目を細めさせて語る。それは満足している何よりの証であった。

彼女との情事にだ。そのことに対して充分満足していることが伺える笑みであった。

第八章

「だからね。舐め方もね」

「わかっておられるのですか」

「そういうことよ」

彼女に対してまた告げる。彼女は話の間にベッドから身体を起こしてである。そのうえで下着からストッキング、そして服を身に着けていく。そうして元のメイドに戻るのであった。

「そしてメイドはね」

「メイドは？」

「好きよ」

メイドに対する言葉はこれであった。

「それはね」

「好きなのですか」

「制服の女性はどれも好きだけれど」

ふと出て来た沙耶香の嗜好であった。同性に対してもかなりの漁色家である彼女だがその嗜好として制服の女を愛する傾向があるようである。

「メイドもその中にあるわ」

「そうだったんですか」

「けれど貴女がメイドでなかったとしても」

「なかったとしても」

「貴女はこうして抱かせてもらっていたわ」

そうするというのだ。述べながら煙草を出してだ。指から火を出してその上で火を吐ける。彼女に背を向けていたので指から火を出したのは見られなかった。

「そういうことよ」

「そうですか。それではまた」

「ええ、またね」

「御夕食はどうしましょうか」

「それは食堂で貰うわ」

そうするというのである。

「楽しみにしているから」

「はい、それでは」

「それまではね」

ここで右手を見る。そこからはテーブルのある部屋が見える。そのテーブルの上に二本のトカイが入ったボックスがある。それとチーズにソーセージもだ。

「ワインを楽しませてもらうわ」

「はい、それではその時に御呼びしますので」

「それでは」

こうして彼女は礼儀正しく一礼しそのうえで部屋を後にした。一人になった沙耶香は煙草を吸い終わるとテーブルに戻り酒を楽しんだ。

ワインを二本飲み終えそれから暫くは風呂で身体を休めさせた。

そうしてすっきりとしたところでベルが鳴った。すると先程とは違ってボーイが来た。黒髪を綺麗に後ろに撫で付けた端正な青年である。丁寧な黒い制服を着ている。

「御夕食です」

「わかったわ」

その彼の言葉にこう応えるのだった。

「それでは」

「はい、御案内致しますので」

「有り難う。それでだけれど」

「何でしょうか」

「後でいいからワインはなおしておいて」

それを下げるように頼むだった。

「もう飲ませてもらったから」

「左様ですか」

「やはりトカイはいいわね」

トカイのその感想も話すのだった。トカイは西欧でもかなり高名なワインである。かつては王侯貴族が愛した美酒なのである。

「それを置いてくれているとはね」

「堪能されましたか」

「ええ、それじゃあ夕食のワインも」

そのことについても述べる沙耶香だった。

「トカイにさせてもらおうかしら」

「それにされるのですか」

「メニューを聞いてから決めるわ」

しかし最終的な決断はここではしなかった。トカイは第一の候補に置いただけである。メニューを聞いてから決めるというのである。

「そうするわ」

「はい、それでは」

沙耶香はその食堂に案内された。黄金に輝く巨大なシャンデリラが幾つもあるその食堂にはオーケストラがモーツァルトの音楽を奏でており着飾った人々が優雅に夕食を採っている。沙耶香はその彼等を見てふと言うのであった。

第九章

「普通の人達が多いわね」

「左様ですか」

「ええ。少し無理をすれば家族で来ることもできる」

沙耶香は微笑んで言う。自分の席に案内されるその中でだ。

「そういう船なのね」

「誰でも決められた費用を払って頂ければ御停泊して頂けます」

ボーイはこう沙耶香に話した。

「お客様の差別はしません」

「いいことね」

沙耶香はそれをいいとしたのだった。

「家族でこうした場所に来るのも悪いことではないわ」

「はい、確かに」

「格差社会という言葉があるけれど」

いささか共産主義めいた言葉ではある。

「その言葉は嘘だからね」

「嘘ですか」

「マスコミは嘘を吐くのが仕事よ」

沙耶香は彼等に対して実に素っ気無く言うのだった。そこには冷淡さすらある。

「自分達の目的に誘導する為にね」

「そうなのですか」

「彼等はまだ共産主義を夢見ているのよ」

これが真実だから恐ろしいのだ。学生運動の亡霊はまだ生き残っているのだ。言い換えればそこから何一つとして頭の中が進歩も発展もしていない人間が存在するのである。

「だから格差社会という言葉が出て来るのよ」

「実際は違うというのですか」

「今この場が何よりの証拠よ」

この船の中こそがだというのである。

「こうして多くの普通の人達が遊べる場所があることこそがね」

「成程」

「けれど見たところ」

ここで沙耶香はある席を見た。見ればその席には品のない顔をした老人がいる。白髪その老人は下品で粗野な仕草で料理を食べている。ネクタイこそしているがその格好も顔立ちも実に卑しい。

沙耶香は彼を見てだ。その名を言った。

「鶏声舜太郎だったかしら」

「はい、鶏声先生です」

「ああいう人間もいるけれど」

目に微かに嫌悪を浮かべさせての言葉だった。

「どうやらとりわけいい席みたいね」

「スイートルームに泊まっておられます」

「格差社会を糾弾し庶民の為という人間が」

言葉には嫌悪だけでなく侮蔑も浮かんでいた。

「ああして贅を極めているというのは喜劇ね」

「喜劇ですか」

「滑稽だけれど醜悪な喜劇ね」

鶏声への嫌悪感はさらに強いものになっていた。

「全くもってね」

「それでなのですが」

ここでボーイは沙耶香に告げてきた。

「宜しいでしょうか」

「私の席に着いたのね」

「はい、そうです」

丁度であった。絹のテーブルがけの見事な丸いテーブルに案内された。そこに着くとすぐにメニューが出されるのであった。

「どれにされますか？」

「そうね」

そのメニューは日本語だけでなく様々な言語で書かれていた。沙耶香はそのメニューを見ながら述べるのであった。

「ここは。そうね」

「はい、何を」

「これにするわ」

一つのメニューを指し示しての言葉であった。

「これにね」

「それにですか」

「ええ、これにさせてもらうわ」

「それでは」

こうして豪華なメニューが出されてきた。フォアグラがメインだがオードブルにはキャビアもありそしてトリュフもある。その他にも上等のサーモンやラム、それにスープにサラダだった。それとパンである。そうしたものをトカイと一緒に食べていく。忽ちのうちに食べデザートとなった。

デザートになるとだ。レストランの者が来て言ってきた。

「デザートでございますが」

「それね」

「はい、これは特別に選べるようになっていますが」

「難しいわね。ただ」

「ただ？」

「面白いものが欲しいわね」

微笑んでこう述べたのである。

第十章

「面白いデザートがね」

「といいますと」

「ピーチメルバみたいなものが欲しいわ」

くすりと笑ってそのデザートの名前を告げた。かつての名オペラ歌手メルバにちなんだものでありアイスクリームと桃を使っている。それをワグナーのオペラローエングリン第三幕の新婚のベッドと白鳥をイメージしたものである。白鳥はこのオペラを象徴する存在の一つでもある。

「それをね」

「ピーチメルバの様なものをですか」

「ええ、そうよ」

まさにそうだとも答えたのである。

「それはあるかしら」

「あるといえば」

「それを御願いするわ」

こう答えてみせたのである。

「是非ね」

「子供っぽいものでいいでしょうか。それとも大人のもので」

「子供か大人か」

「はい、どちらかです」

沙耶香自身に選んでもらうというのである。レストラン側もさるものである。こうして彼女を試してもきているというわけなのである。

「どちらかですが」

「そうね。それじゃあ」

「それじゃあ」

「子供っぽいものを貰うわ」

微笑んでこう告げたのである。

「そちらをね」

「畏まりました。それでは」

「それで何を持って来てくれのかしら」

「フンパーディングです」

ウェイターは笑ってこう述べてきた。

「それです」

「そう、期待できるわね」

「それだけでおわかりなのですね」

「子供っぽいようでいて実は大人の味でもある」

沙耶香はここでも楽しそうな笑みを浮かべてみせた。そうしながらその右手にワイングラスを掲げている。そこにはトカイの薄い独特の色があった。

「あの作曲家は見事な味ね」

「やはり御存知でしたか」

「ドイツオペラは好きよ」

また言ってみせる沙耶香だった。

「もっともイタリアオペラも好きだけれどね」

「左様ですか」

「それではそれをね」

頼むというのである。

「御願いますわ」

「わかりました。それでは」

「あとコーヒーを御願いますわ」

それもだというのである。

「コーヒーは。そうね」

「ワインナーをですね」

「わかっているわね」

ウェイターの言葉を受けてさらに微笑むのだった。

「そこまでわかっているとは」

「お客様もまた」

「あのお客様にはそれを尋ねたのかしら」

ここでもまた鶏声を一瞥する。今度は動物的にワインを飲んでい
る。その動作がこれまた実に品がない。その顔に相応しい動作では
あった。

「こうしたことは」

「いえ、それは」

「しなかったのね」

「既にわかりますから」

だからしないというのである。

「ですから」

「そうね。ニュースキャスターをしているからといって教養がある
とは限らないわ」

沙耶香は実に冷たく述べた。

「所詮はね」

「そうなのですか」

「教養は学歴や職業とはまた別のものよ」

当然のことだが実はよく知られていないことでもあることを述べ
たのだ。

第十一章

「むしろマスコミ人というものは」

「教養はですか」

「全てがそうではないけれど」

「こうした前置きはするがであった。」

「あの御仁と同じ人間が多いわね」

「左様ですか」

「困ったことと言わねばきかさもありませんと言わねばか」

それについてはあえて言わない沙耶香だった。

「けれどそれでもね」

「あの方にはそういうものはないというのですね」

「ないのはそれだけではないでしょうけれど」

沙耶香は鶏声に対しては何処までも侮蔑を見せるのだった。

「まあとにかくね」

「デザートですね」

「フンパーディングをね」

また彼の名前を口にしてみせたのである。

「頼むわ」

「はい、それでは」

こうして彼女のデザートが決まった。暫くしてチョコレートケーキにチョコレートのアイスクリームにチョコレートそのものを中心として作られたお菓子の家が持つて来られた。沙耶香はそれを見て満足そうに笑って言うのであった。

「これがそれね」

「はい、フンパーディングです」

ウェイターも微笑んで彼女に述べた。

「如何でしょうか」

「いいデザートいうものはね」

「それは」

「見ただけでわかるものよ」

その目を細めさせての言葉である。

「それだけでね」

「ではこのデザートは」

「わかったわ」

目は細めさせたままである。既にワインは飲み終えている。デザートとその家の隣に置かれたコーヒーの香りがワインのそれに代わっている。

「それだけでね」

「では」

「それでは。食べさせてもらうわね」

「わかりました」

こうして沙耶香はそのデザートを食べはじめた。その味は彼女が言った通りであった。コーヒーマも飲んでだ。そのままレストランを後にするがその時に中を見回すのも忘れなかった。そうしてそのうえで言うのであった。

「大体わかったわ」

こう言ってであった。そのまま一旦カジノに向かった。この船の中ではそうしたカジノも置かれているのである。ルーレットにカード、そうしたことに興じる者達で集まっていた。

その中に一人の若い男がいた。彼は場の賑やかな端で一人バーのカウンターにいる。そしてそこで一人カクテルを飲んでいた。

その横にはビリヤードもある。そこでも多くの者が明るい笑みを浮かべている。しかし彼はそういったものにも目もくれないのだった。

彼は一人飲み続けている。沙耶香はその若者のところにだ。あるものを投げたのである。

「!？」

「いいかしら」

それは一輪の白百合である。それを魔術で出してみせて彼の前に投げたのである。それは彼の前に静かに落ちてそこに香りを漂わせた。

花のその香りの中で沙耶香は彼の隣に来てだ。静かに問うてきたのである。

「お酒は好きではないのかしら」

「いえ、好きです」

男は項垂れたまま答えた。その声は沈んでいた。

「好きですけど」

「今は、なのね」

「そういうことです。実はですね」

「よかったら話を聞かせてもらおうわ」

「お話をですか」

「ええ、どういったものかね」

その口元に笑みを浮かべさせての言葉である。それで彼に対して言ってみせたのである。そうしてまた彼に対して言葉を出したのである。

「よかったらね」

「そうですか」

男はそれを聞いてだ。まずは大きく溜息をついた。カクテルが入ったそのグラスを右手に持ちながらだ。そのうえで沙耶香に対して言ってきたのである。

第十二章

「それではですね」

「どういった話なのかしら」

「個人的な話です」

これは前置きであった。それからまた言うのだった。

「あくまで個人的な話ですが」

「そう、個人的なね」

「私には友人がいました」

言葉は過去形だった。そこからはじまる話だった。

「いい奴でした」

「親友だったのね」

「はい」

「大切だったのね」

話を聞きながら今はカクテルを頼んだ。頼んだのはアドニスⅡカクテルである。ギリシア神話に出て来る絶世の美少年の名前を関したそれはシェリーとイタリアンⅡベルモットを組み合わせたものである。その濃い、黒に近い赤のカクテルを頼んだのだ。

そしてそれを右手に持ちながらだ。彼の話を聞くのである。

「その人が」

「いい奴でした」

また言う彼だった。

「ずっと。子供の頃から」

「幼馴染みでもあったのね」

「その通りです。ずっといい奴でした」

「そう、ずっとね」

「一緒にいて。いつも助けてもらって」

そのことを話していくのだった。だが語るその顔には懐かしさよりも苦さ、それに悲しさがあった。その二つの感情に支配されなが

ら語っていた。

「そんな奴でした」

「本当に大切だったのね」

「今もそう思っています」

そしてそれは過去だけではなく現在もだという。そう語っていくのだった。

「ですが」

「ですが？」

「あいつは死にました」

こう言うのだった。話は本題に入った。

「もうこの世にはいません」

「そうなの」

「呆気ものですね」

それは人の死を語る言葉だった。その言葉をここで出したということが何よりの証だった。それは沙耶香も話の最初でわかった。だがそれはあえて言わずに彼の話を聞くのに徹したのである。それが一番だということもわかっていたからだ。

「事故だね。病院に行った時には既に」

「全てが終わっていたのね」

「手遅れでした」

そうだったというのだ。深く沈んだ声での言葉だった。

「何もかも」

「それでどうなったのかしら」

「私に言ってきました。これは申し遅れたことですが」

また話に前置きが入ったのだった。それは何かというのである。

「私は彼の姉と長い間交際していました」

「お姉さんとね」

「彼女とも幼い頃からでして。本当に子供の頃から長い間一緒にいて。そんな関係でした」

「そしてその人はどうなったのかしら」

「彼は言いました」

ここで話が戻った。その親友のことにだ。

「姉を頼むと。自分の分まで」

「貴方に託してくれたのね」

「それが彼の最後の願いでした。それを私に告げてこの世を去りました」

「そうだったの」

「それで私は彼女と結婚しました」

そうしたというのだ。それでだ。

「それが私の今の妻です」

「成程ね」

「ですが」

しかしなのだった。ここで言葉がまた暗鬱なものになった。その言葉と共に彼はまた話すのだった。

「妻は今ここにはいません」

「どうしたの？」

「妻もまた事故に遭ったのです」

声には無念なものが宿っていた。その言葉と共に話したのである。

「一週間前に」

「それで奥さんは無事なの？」

「今も生死の境を彷徨っています」

そうなっていると話す。話すその言葉は沈痛な響きの中にある。

その響きの中でさらに話すのだった。話すだけでも辛く苦しい、彼の今の心理もそのまま透けて出てしまっている、まさにそんな言葉であった。

第十三章

そしてその言葉でだ。彼は沙耶香に対して話を続ける。

「ですが私は今ここにいます」

「どうしてなのかしら」

「家の、一族の者に言われまして」

「一族のね」

「はい、この船の客には妻と二人で予約を取っていました」
「そうだったというのだ。このこともここで話す彼だった。」

「ですが生死の境を彷徨っている妻の傍を離れることは嫌だったの
ですが」

「それで何故ここにいるのかしら」

「その一族の者に無理に言われまして」
「だからだというのだった。」

「それでなのです」

「それは何故かわかるのかしら」

「わかりません」

今度は首を横に振っての言葉だった。

「私にはそれは何故か」

「そう、わからないのね」

「とにかくここには行くように無理に言われまして」

「それで今ここにいます」

「妻は今にも死ぬかも知れません」

また沈痛な声を出した彼だった。

「本当にです」

「不安なのね」

「はい、不安で仕方ありません」

このことも言葉に出すのだった。不安そのものが具現化した言葉
だった。

「どうしてもここにはいたくないのに」

「けれど言われて」

「本当に。妻は」

「場所を変えようかしら」

「ここで沙耶香はこう言ってきたのだった。」

「それじゃあ」

「場所をですか」

「ええ、場所をね」

「変えるというのだ。彼女はだ。」

「変えましょう」

「何処にですか？」

「外よ」

「含むものを隠した言葉であった。」

「外でね」

「外にですか」

「中にばかりいてもよくないわ」

「そしてこうしたことも言うのだった。」

「だからね。今はここを出ましょう」

「そうですか」

「もっともそれが嫌ならいいけれど」

「いえ」

しかしであった。彼も思うところができたのか沙耶香のその提案に頷いたのである。そしてそのうえで静かに述べてきたのである。

「わかりました」

「それではいいのね」

「外ですね」

「今度は問うた。沙耶香に対してだ。」

「外に行けばですね」

「そうよ。そこよ」

やはりそこなのだという。沙耶香の言葉は動かなかった。このこ

とについてはだ。

「外よ。いいわね」

「わかりました」

男は沙耶香の言葉に頷いてであった。そのうえで席を立った。

沙耶香もそれに続く。二人は勘定を済ませてそのうえでまずはバーを出た。そうしてそのうえで客船の中から外に出るのであった。向かうのは甲板であった。

甲板の縁に向かう。案内をするのは沙耶香であった。夜の星達が二人を照らしていた。

沙耶香はスーツで男はタキシードである。その夜の闇に隠れる服をそれぞれ着てであった。まずは沙耶香が言ってきたのである。

「それだけでけれど」

「先程の話の続きですね」

「ええ。それで奥さんのことが心配で仕方ないのね」

「今ここにいていいのでしょうか」

沙耶香は甲板のその縁に背をもたれかけさせた。両肘もそこにかける。そのうえでゆっくりとした姿勢になって男の話を聞く態度になった。

男はその横に来て海の方に身体を乗り出す姿勢で縁に両肘をついた。二人の影はそのまま海面に映っていた。客船の大きな影の下にぽつりとである。

第十四章

だが男は今は海面を見ていなかった。陸の方を見ていた。そこには東京の夜景があった。永遠の魔都のその光をである。

その光を虚ろに見ながらである。男は沙耶香に対して言うのであった。

「どうしてだと思えます？」

「どうしてとは？」

「いえ、何故私を無理にここに来させたのでしょうか」

不安と絶望に満ちた顔を沙耶香に向けての言葉だった。

「それは一体何故なのでしょううか」

「それはね」

「おわかりになられるのですか？」

「ええ、わかるわ」

その言葉と共にであった。沙耶香の方を見ている彼は気付かなかった。彼の影から何かが出て来た。それは不気味に蠢く、蛇に無数の触手が生えた様なそうしたものだ。それが彼の影から出て来たのである。

そして沙耶香の影は彼女が動いていないのに自然に動いていた。その右手に何か剣を出しそのうえでだ。男の影から出て来た禍々しいものと闘いはじめたのだ。

しかし沙耶香はそれを見ていない。その闘いが映る海面には背を向けたままである。そのうえで男に対して言ってきていたのである。

「よくね」

「よく、ですか」

「それは貴方も奥さんも救われる為によ」

「私も妻ですか」

「そうよ。人は気付かれないうちに」

沙耶香は言うのだった。その間にふと左手を軽く自分の顔にやっ

た。そこに黒い輪、チャクラムに似たものを出していた。だが闇の中に沈んでいるそれは男の目には見えないものだった。

そのチャクラムを人差し指だけで後ろに投げる。それは彼女自身の影に変わっていきそのまま飛んでいくのであった。魔都の中に。その素振りを一切気付かせないままだ。沙耶香は男に対してさらに言うのであった。

「因果の中にいたりするものよ」

「因果のですか」

「そうよ。自分でも気付かないうちにね」
静かにこう語ったのである。

「まずは貴方は」

「私はですか」

「失う因果の中にいるわね」

それが彼の因果だと告げたのである。

「どうやらね」

「失う因果をですか」

「まずはそのお友達ね」

最初に話に出したのは彼だった。

「大切に思っていたのよね」

「はい、何よりもです」

彼は沙耶香に答え続けていた。やはり彼女が闇の輪を飛ばしたところには気付いていない。

「あいつは本当に」

「けれど失ってしまったわね」

「それが私の因果なのね」

「そういうことよ」

「では妻は」

沙耶香は今ここでは彼の問いに答えなかった。そのかわりにこう言ってきたのである。今度の言葉はというのだ。

「そして貴方のそのお友達も奥さんも」

「妻もまた、ですか」

「因果の中にあるわ。それはね」

「はい、その因果は」

「悲しみを与える因果よ」

それが彼女の妻の因果だと話すのである。

「それがなのよ」

「それが妻の因果ですか」

「そうよ。お友達は死んだことによって貴方に悲しみを与え」

それこそが悲しみを与えるということなのだというのだ。

「そして奥さんもまた」

「それなら」

「安心して」

その話の最中にも沙耶香の影とその異形の影の闘いは続いていた。沙耶香の影は剣を振るっている。そうしてその異形の影を次第に追い詰めていた。

その闘いの中でだ。沙耶香はまた言うのであった。

「因果というものはね」

「因果は」

「断ち切られるものなのよ」

そういうものだとかえるのだった。

第十五章

「必ずね」

「必ずですか」

「そう、断ち切れるもののなのよ」

言葉を少し変えてみせたのだった。彼に気付かれないように、だが無意識に訴えるようにしてだ。微妙に変えて語ってみせたのだ。

「自分によっても人によっても」

「人によってもですか」

「貴方も奥さんも今その因果が断ち切られるわ」

その言葉を出したその時だった。沙耶香の影の剣が闘っている異形の影を貫いたのだった。それで全てを終わらせたのである。

異形の影は消えた。沙耶香はそれを見ていなかったがそれでも彼に告げるのだった。

「そう、今みたいだね」

「今、ですか」

「貴方も奥さんも因果は断ち切られたわ」

「それは本当ですか？」

「すぐにわかるか」

信じられないといった顔で言った彼に対しての言葉である。

「すぐにね」

「まさか、そんな」

沙耶香のその言葉を今度は否定しようとした。しかしここで、出会った。

不意に携帯が鳴った。それは彼の携帯だった。

「！？今度は一体」

「早速ね」

沙耶香は前を見たまま笑って述べた。

「来たのね」

「来たって何が……これは」

彼はその携帯のメールを見てだ。驚きの声をあげた。そのうえで沙耶香に対して言うのだった。

「あのですね」

「奥さんのことね」

「何故それがわかるのですか？」

「勘よ」

ここではこう言うだけだった。

「勘でわかったのよ」

「勘、ですか」

「だからそれは気にしないで」

言葉を微笑まさせながらの言葉だった。

「それで奥さんは」

「目を覚ましたそうです」

こう沙耶香に告げるのだった。

「今しがた」

「そう、よかったわね」

「全く。嘘みたいな話です」

彼は嬉しさを噛み締めていた。

「こんなことになるなんて」

「嘘ではないわ。奥さんは助かるのね」

「もう命に別状は無いそうです」

喜びに満ちた言葉はまた出された。

「嘘みたいな話です」

「嘘じゃないわ。ただ」

「ただ？」

「携帯はそこで出していると」

まだ海に向かって顔を出している姿勢の彼に対しての言葉であった。

「危ないわよ」

「あっ、そうですね」

「海に落としたらそれで終わりだから」

このことを彼に言ってみせたのである。余裕は明らかに沙耶香の方が持っていた。今の男にはそうした余裕は全くなかった。

「だから。そこから離れてね」

「はい、とにかくこれで」

「楽しい船旅になるわね」

「今回はこの客船は出港しないのですね」

「そうよ。ここにあるだけよ」

停泊したままだというのだ。沙耶香はそのことも知っていた。だがそれでもいいというのだ。今の彼女は出港しての船旅にはこれといって興味を持っていないのである。

そしてである。彼女は静かに言うのだった。

「それじゃあ後は」

「はい、まずはですね」

彼は身体を起こした。そのうえで身体を船の方に向けてだ。一転して明るい顔になってそのうえで沙耶香に声をかけるのであった。

「一人で祝います」

「またバーで飲むのね」

「今度は美味しい酒が飲めます」

喜びそのものの言葉だった。

第十六章

「おかげで」

「お酒というものはね」

またその彼に対して語ってみせたのだった。

「美味しく飲むものよ」

「美味しくですか」

「そうよ。美味しく飲むものよ」

これは沙耶香の考えだった。彼女は酒を愛している。色と同じだけ愛している。だがそこにはこうした考えが存在しているのである。そしてその考えによってだ。今言うのだ。

「美味しくね」

「それはわかっていましたが」

「これからは美味しく飲めるわね」

「ええ、それは」

このことについてはというのである。間違いないというのだ。返答も明るいものだった。

「本当に。突然のことですが」

「因果は断ち切られたわ」

沙耶香はまたこの言葉を出してみせた。

「これでもうね」

「恐れることはないですか」

「そうよ。安心して奥さんと二人でね」

「できればあいつをここに呼びたいのですが」

「ふふふ、流石にそれは無理ね」

目元と口元を僅かに綻ばさせての微笑みだった。

「貴方にとっては残念だけれど」

「それはまた今度ですか」

「そうすればいいわ。それじゃあね」

「はい、それでは」

「また機会があれば会いましょう」

こう言って彼に別れを告げた。彼はそのまま船内に戻っていく。一人になった沙耶香だったがその前にだ。もう一人の沙耶香が出て来た。そうして彼女自身に対して言ってきたのである。

「終わったわ」

「ええ、わかってるわ」

沙耶香は微笑んで彼女自身の言葉に応えた。

「それはよくね」

「そう、やはりね」

「私自身がしたことわからない筈はないわね」

「その通りね。それで向こうの因果は」

「これよ」

もう一人の沙耶香は右手からあるものを出してきた。それは禍々しく曲がった瞳のない人の首だった。闇の中にそれを転がして言うてみせたのである。

「呆気無かったわ」

「それが因果だったのね」

「弟さんを殺し、そしてあの奥さんも殺そうとしたね」

「二人についていた因果はこれで消えたのね」

「ええ、これでね」

自分自身の言葉に応えて頷く沙耶香だった。

「完全にね」

「わかったわ。それじゃあ」

「私はこれで戻るわ」

「有り難う。それじゃあ」

もう一人の沙耶香はすっと前に出て来た。そのうえで自分自身の唇に己の唇を合わせるとであった。まるで霧の如く消え去ってしまったのだった。

一人に戻った沙耶香はすぐに船の中に戻った。そのうえでふと立

ち寄った場所は。

医務室であった。そこに入るとだ。一人の女医がいた。

白衣の下に黒いタイトのミニスカートとセーターという格好である。脚は素足ではなく黒いストッキングに覆われている。髪は長い腰まであるものを後ろでくくっている。左目の目尻にある黒子は泣き黒子であった。胸の大きさも目立ち紅の大きめの唇を持つ艶めかしい女である。

沙耶香は彼女のところに来た。そのうえで静かに声をかけてきた。白い部屋の中はベッドも何もかもが清潔なものだ。その中に黒い女が入って来て言うのである。

「今は時間あるかしら」

「いきなり何かしら」

その女医は沙耶香に顔を向けて問うてきた。

「見ない顔だけれど」

「客よ」

沙耶香の今の言葉はそのまま真実だった。

「客だけれど」

「お客さんね。船酔いかしら」

「停まっている船で酔ったりするのかしら」

「人によってはね」

微笑んで話す女医だった。

第十七章

「あるわよ」

「そうなの。人によってはなのね」

「ええ。酔うこともあるけれど」

「これまで船旅は色々楽しんできたけれど」

これもまた真実である。彼女は外国で仕事をした帰りに船で帰ることも多いのだ。その時に船旅を楽しむこともよくあるのである。

それでだ。今はこう言うのだった。

「それはないわ」

「船酔いではないの」

「それではないわ」

それは違ふとまた話すのだった。

「別の病よ」

「別のね」

「それも治されるのは私ではなくて」

言葉が続けていくのだった。沙耶香はその間に部屋の中央に進んでいく。

それから白い診察用のベッドに入っただ。そのうえで話すのであった。

「貴女よ」

「私が？」

「匂いを感じたわ。気配でもね」

「気配で」

「ええ、その二つでわかったのよ」

ベッドのところに腰掛けてである。そうして女医に顔を向けながら彼女自身に話すのだった。その整った妖艶な顔を見ながらである。

「貴女は今困っているわね」

「私が？何にかしら」

「その左手の薬指は」

「ああ、これね」

それを言われてくすりと笑ってみせた女医だった。

「このことなのね」

「結婚した。けれど夜のことではね」

「面白いことを言うわね。推理かしら」

「推理ではないわ」

それは否定するのだった。

「事実を言っているのよ」

「強気ね。推理ではないのね」

「ええ、違うわ」

こう言っただけである。さらに言ってみせるのであった。

「貴女は夜に不満がある。けれど男の人は足りている」

「男は一人だけの主義なのよ」

女医は自分の席に座ったまま沙耶香と向かい合っている。そうしてそのうえで左足を上にして組んでいる。スカートの奥がもう少しで見えそうになっている。男ならばそれだけで刺激されずにはいられない、そうした姿勢であった。

その姿勢でだ。さらに話す女医だった。

「生憎だけれど」

「男はね」

「主人だけよ」

こう言うのである。

「私は主人だけなのよ」

「浮気はしないのね」

「興味はないわ。男は一人だけしかね」

「純愛ね。ただそれでもよ」

「それでも？」

「男は一人でもう一つはどうかしら」

沙耶香の目が細められてきた。そしてその奥に赤い光が宿るのだ

った。琥珀の奥にルビーが輝く様な、そうした笑みであった。

「そちらは」

「あら、では私は今は」

「女性ね」

顎に手を当てての言葉だった。

「それなのね」

「そうね。女性もいいわね」

「ふふふ、それじゃあ今からどうかしら」

こう女医に問うのだった。

「今から私と」

「悪くはないわ。ただ」

女医もまた目を細めさせてきた。そうしてそのうえで言葉を返してみせた。熟れたその肉体は沙耶香のそれと比べても遜色のないものである。

第十八章

その身体を沙耶香に見せながらだ・さらに言うのだった。

「貴女は満足にできるかしら」

「満足には」

「そうよ、私の相手は厳しいわよ」

右手の肘を机に置いて拳を頬にやってだ。そのうえで沙耶香に問うてみせてきたのである。

「それもかなりね」

「大丈夫よ。私ならね」

「貴女ならなのね」

「そうよ。それじゃあ」

「そうね。じゃあ」

「楽しみましょう」

女医を誘う言葉も出された。

「いいわね」

「ええ、じゃあ見せてもらうわ」

女医は席を立った。そのうえで沙耶香に近付いてだった。彼女が今いるベッドのところに来てである。二人で肌を重ね合うのであった。

それが終わってからだった。女医は服を着ていた。立ち上がってそのうえで白衣を羽織ってだ。今はベッドに仰向けに寝ながら微笑んでいる沙耶香に顔を向けた。沙耶香もその服は既に着ていた。ただネクタイのところはまだ解かれていた。

その格好でだ。女医に対して言って来た。

「よかったわ」

「悔しいけれど負けたわ」

そうは言っても満足した笑みを浮かべる女医であった。

「見事ね。私が適わなかった女は貴女がはじめてよ」

「そう。それは光栄ね」

「光栄に思っているわ。それはね」

「嬉しい言葉ね。それじゃあ」

「ただの人じゃないわね」

沙耶香への言葉である。

「貴女は」

「そう思うのなら思っているわ」

「別の人も香りもしたし」

このことも話してきたのである。

「もう既に一人。頂いているのね」

「花は摘むものよ」

これが沙耶香の返答だった。

「綺麗な花なら何でもね」

「それで私もなのね」

「そういうことよ。それじゃあ」

ここで沙耶香は立ち上がった。そのうえでネクタイを締めてだ。

上着も調べてそのうえでベッドから出てであった。部屋の外に向かうのだった。

「私はこれでね」

「また来てくれるかしら」

「気が向けばね」

今はこう答えるだけだった。

「そうさせてもらうわ」

「それじゃあその時を楽しみにさせてもらうわ」

「それでね」

ここで沙耶香は彼女の方に振り向いた。そのうえで最後に声をかけたのである。

「貴女だけねど」

「私が？」

「御主人と別れる気はないのね」

問うのはこのことだった。

「それについては」

「ないわ」

女医は微笑んで沙耶香のその問いに答えた。

「全くね」

「そう、全くなの」

「主人は愛しているわ」

このことは間違いないと。それは確かな言葉であった。

「けれどね」

「けれど、なのね」

「女はね」

ここで沙耶香を見て言うのだった。

「わかるわよね」

「ええ、よくね」

彼女に顔を向けたまま微笑んでの言葉だった。

「私もまた女だから」

「女は身体を欲しがるものなのよ」

「愛と共に」

「主人の心は愛しているし」

「けれど身体は求めても」

「それなら。方法は一つしかないわ」

これが彼女の主張であった。

第十九章

「こうして同性とね」

「いいことよ。同性愛が罪悪というのは」

「あれは間違いなのね」

「我が国ではないわね」

目を細めさせての言葉である。これは歴史にある通りだ。実際に我が国では同性愛で捕まったり罪に問われた者は有史以来一人もない。これが我が国である。

「それに。罪でも」

「いいのね」

「罪は犯すからいいのよ」

その細めさせた目と共の言葉だった。

「余計にね。それに」

「まだあるのね」

「甘い罪であればあるだけ」

沙耶香はこうも言ってみせるのだった。

「いいものではなくて？」

「そうね。その通りね」

「不義が許されないなら」

不倫をより艶やかに言ってみせたのである。

「それとは別の罪を犯せばいいのよ」

「それがこれ」

「そうよ。これがね」

同じ女を相手とすること、まさにそれだというのである。

「男の人は御主人だけよね」

「絶対よね」

「ならそうするといいわ」

それを認めたうえでの言葉だった。

「けれど女は」

「誰でもいいのね」

「こちらの罪は犯せば犯す程甘いものだから」

「わかったわ。それじゃあこれから」

「そうしなさい。それじゃあ」

「ええ、また」

ここでようやく顔を戻した。そのうえで部屋を後にした沙耶香だった。その身体に女医の濃厚な香りをまとったまま。退廃を満たした微笑みを浮かべて去るのだった。

この日はこのまま眠った。そして朝になるとまずシャワーを浴びることにした。ところがここで部屋のベルが鳴ってきたのである。

清らかな音だ。朝の目覚ましとしてはかなりの気品ある音だ。沙耶香は一糸まとわぬ姿でベッドの中から出ながら。その音に応えるのだった。

「どうぞ」

「入って宜しいですか？」

「ええ、いいわよ」

昨日のメイドであった。彼女の声だった。

沙耶香はその声に応えてみせたのである。声にはもう微笑みが宿っている。

「どうぞ」

「はい、それでは」

こうして彼女は部屋に入った。しかし今度は一人ではなかった。

もう一人いたのだ。今度は黒髪の長い小柄な少女だった。やはりメイド服を着ていてその人形を思わせる楚々とした顔を彼女に向けていたのである。

「一人じゃないのね」

「駄目でしょうか」

あのメイドがおずおずと彼女に尋ねた。

「ベッドメイクは一人では」

「この部屋にお付きのメイドは一人じゃなかったのね」

「実は」

彼女の目が少し泳いだ。

「そうなりまして」

「そうなの。まあ一人より二人ね」

そのギリシア彫刻を思わせる見事な肢体を二人に見せながらの言葉である。髪は今は解かれその長い姿で胸や裸身を覆っている。だがその見事な大きさと形の胸も豊かな尻も引き締まった腰もだ。全てその形は二人に対して見せ続けているのである。

「その方が何かとね」

「いいですよね」

「その娘は知っているのかしら」

沙耶香は最初のメイドに今度はこう尋ねた。

「もう」

「はい、実は彼女は」

「そうなの。そちらの娘なのね」

「親友同士でして。私は今までそうした趣味がなかったので」

「いいわ。わかったわ」

沙耶香は彼女の言葉を受けて頷いてみせた。

第二十章

「それじゃあね」

「宜しいですね」

「まずはシャワーを浴びるわ」

こう二人に告げるのだった。

「いえ、そうね」

「何か」

「お風呂にするわ」

口元を思わせぶりな語りにしながらの言葉だった。

「その方がゆっくりできるからね」

「では今から」

「いらっしやい」

二人への言葉だった。

「この部屋のメイドは二人なのよね」

「そうです」

「私です」

そのもう一人の少女もねだるようにして言ってきた。

「ですから。どうか」

「お風呂掃除は。そうね」

その豪華な風呂場を見てであった。かなりの広さでそれだけ下手なホテルの部屋の一つ分はある。トイレは別の場所にあり風呂とは完全に分かれていた。

「服を着たままでするものじゃないわね」

「ではこれから」

「三人で」

こうして三人で風呂場に入った。沙耶香は二人の肢体を心ゆくまで楽しみそれを朝の宴としたのだった。

そして風呂から出るとそれから服を着て朝の食堂に向かった。見

れば朝はテーブルは自由席だった。そしてバイキング形式であった。

「朝はこれなのね」

「はい」

沙耶香の席についていたあのボーイが朝もいた。そうして彼女の言葉に応えてきたのだ。

「何でも好きなものをお召し上がり下さい」

「いいわね。朝からこうした豪勢なものね」

「左様ですか。満足して頂けそうですか」

「朝に少し身体を動かしたし」

二人のメイドとの情事のことであるのは言うまでもない。

「その分。こちらも楽しませてもらうわ」

「朝にお身体をですか」

その言葉を聞いたボーイはこう考えた。その考えとは。

「ではプールかジムにでも」

「プールもあるのね」

「左様です。そちらではないのですか」

「そうしたスポーツをする趣味はないのよ」

「思わせぶりに笑ってみせての言葉である。」

「残念だけれど」

「それでは何を」

「身体を動かすことはスポーツだけではないわ」

「ここでも思わせぶりの言葉だった。笑みもそのままだ。」

「それだけではね」

「？申し訳ありませんが」

「言葉の意味がわからないというのね」

「申し訳ありません」

まさにその通りだというのである。

「それは」

「わからなくてもいいのよ」

これが沙耶香の返答だった。

「別にね」

「わからなくてもいいのですか」

「そうよ。それでだけれど」

「はい」

「プールがあるのはいいわね」

このことについての話になっていた。

「それはね」

「泳がれるのでしたら水着を貸し出すことができますが」

「いえ、泳ぎはしないわ」

だがそれはいいというのだった。

第二十一章

「スポーツをする趣味はないから」

「先程のお言葉通りですね」

「その通りよ。だからね」

「わかりました、それでは」

「プールがあるのがわかったのはいいわ」

それでいいという。そして話を戻してきた。その戻された話は。

「それでなのだけれど」

「はい、今度は一体」

「お酒はあるかしら」

「お酒ですか」

「ええ、何があるかしら」

朝から美酒をというのである。沙耶香は悠然とした笑みを浮かべそこに濃厚な退廃さえ見せてそのうえで話してみせたのである。

「朝は」

「シャンパンがありますか」

ボーイはそれを話に出してきたのだった。

「それにされては」

「そう。それじゃあね」

「飲まれますか」

「ボトルで持って来てくれるかしら」

それをボトルでというのだった。この辺りが実に沙耶香らしかった。

「一本ね」

「それでしたら別料金になりますが」

「いいわ、それでも」

その悠然とした笑みはそのままだった。

「それでね」

「左様ですか。それでは」

「ワインもいいけれど」

沙耶香は目元に笑みを浮かべさせながら述べた。

「シャンパンもまたいいものだから」

「そちらもお好きなのですね」

「お酒は。何でも好きよ」

目を細めさせてさえしてみせた。

「何でもね」

「そうですか。好きですか」

「ええ、好きよ」

また述べる沙耶香だった。

「だからね」

「シャンパンもまた」

「そうよ。持って来て」

「わかりました」

こうしてであった。沙耶香のところにシャンパンが一本持って来られた。そしてその他にサラダやフルーツ、それにハムやソーセイジにチーズ、テリーヌ等といったオードブルの朝食を摂った。その量も質も豪勢な朝食を終えてから席を立ちレストランを出た。出る時にあのボーイにまた問うのだった。

「それでだけねど」

「プールの場所ですね」

「それは何処かしら」

このことを問うのだった。

「それでそこは」

「船のマップをお渡ししましょうか」

「船のなのね」

「はい、それを」

渡そうかと提案してきたのである。

「それで宜しいでしょうか」

「ええ、御願するわ」

沙耶香はすぐにその問いに頷いた。

「それではね。それで御願いね」

「では」

こうして沙耶香はその船のマップを受け取った。それを見ながらプールに辿り着いた。今は朝だがそれでももうそこは開いていた。

見ればかなり大きなプールだ。五十メートルである。屋内にあり水色の床が実に美しい。それぞれのコーナーに区切られており観覧席とは窓で隔てられている。

そこにいるのは一人だった。競泳水着の女が一人泳いでいる。沙耶香はそれを見て笑うのだった。

そしてだ。カウンターにいる若者に声をかけるのだった。

「ねえ」

「はい？」

「私も中に入っているかしら」

「泳がれるのですか？」

「そういうところよ」

ここでは微笑んで述べるのだった。ただし真実は言っていない。

第二十二章

「だからね」

「では水着ですが」

「ここでレンタルできたわね」

「はい、無料です」

若者は沙耶香を全く疑うことなく答えた。

「今ここでお貸ししましょうか」

「ええ、御願いますわ」

便宜上述べた言葉だったがそれでも言うのだった。

「それでね」

「お客様は見たところ」

若者は沙耶香を上からしたまで一瞥してから。こう述べてきた。

「このサイズの水着ですね」

「それなのね」

「はい、これです」

言いながらプラスチックのケースに入った小さく折られた水着を出してきたのだ。色は黒であり競泳水着なのはすぐにわかった。

「何でしたらタオルもありますか」

「タオルはいいわ」

「それは宜しいのですか」

「ええ、いいわ」

笑ってそれはいいとしたのだった。

「別にね。じゃあ更衣室は」

「あちらです」

若者は今度は向こう側、沙耶香から見て右手を左手で指し示したのだった。

「あちらにあります」

「そう、ありらね」

「はい」

見ればそこに入り口があった。案内が日本語だけでなく英語、中国語でも書かれている。そこが更衣室であるというのである。

「あちらになりますので」

「わかったわ」

沙耶香は彼のその案内を受けて静かに頷いた。

「それじゃあそれでね」

「行かせてもらうわ。それじゃあね」

「はい、それでは」

こうして沙耶香は水着を受け取り更衣室に入った。しかし水着を着ずに部屋の中に並んでいるロッカーに背をもたれかけさせてだ。そのうえで静かにたたずんでいた。

やがてだった。そこに一人来た。長い髪を拭きながら着ている。

水着は黒い競泳水着である。その整ったスタイルがはつきりと出ている。脚も長く綺麗な形である。長い髪は黒くやや縮れている。顔立ちは大人びた整った美しさである。年齢はおおよそ二十一であろうか。その美しい女が更衣室に入って来たのである。

沙耶香は彼女が部屋に入って来るとだ。すぐに声をかけてきた。

「ねえ」

「はい？」

「見させてもらったわ」

特化―に背をもたれかけさせながらの言葉だった。

「充分にね」

「私が泳いでいるのをですか」

「ええ。見させてもらったわ」

それをだと言ってみせたのだ。

「充分にね」

「そうだったんですか」

「見たところ」

美女の肢体を見る。均整は取れているが筋肉は発達していない。

その肢体を見ての言葉だ。

「水泳を専門的にはしていないわね」

「好きは好きですけど」

「それでも選手やそうしたものではないわね」

「はい」

美女もこのことに対して素直に頷いて認めてきた。

「その通りです」

「そうね。それはわかるわ」

「何故ですか、それは」

「身体だよ」

それでわかるというのである。

「それに髪でね」

「髪もですか」

「まず身体は筋肉質ではないわ」

沙耶香はまずこのことを彼女自身に話した。

「それはね」

「身体が筋肉質ではない」

「水泳は全身を使うわ。だから始終泳いでいるとどうしても身体中の、とりわけ肩の筋肉が発達してしまうものなのよ」

「それを見てですか」

「ええ。そして」

さらにであった。沙耶香のその言葉が続く。

第二十三章

「貴方の髪の色は綺麗な黒ね」

「髪の色は」

「染めてもいない綺麗な黒ね。プールの中にいれば」

「脱色していく」

「どうしてもね。けれど貴女にはそれがない」

指摘する二つ目のことはこれであった。

「だからよ。この二つでわかったのよ」

「そうだったんですか」

「いいわ。中々」

そして今の言葉であった。

「気に入ったわ」

「気に入った。何をでしょうか」

「貴女がよ」

こう言ってみせたのである。

「貴女がね」

「私が」

「そうよ。幸い」

沙耶香はそこに居続けた。だが、であった。美女の後ろから出て来てみせたのである。もう一人の沙耶香がそこに出て来たのである。

「ここにいるのは二人だけよ」

「二人だけ」

「そう、二人だけよ」

彼女の後ろから笑って言ってきたのである。

「二人だけ。後には誰もいないわ」

「では一体何を」

「貴女を楽しみに来たのよ」

またもう一人出て来た。彼女の前にである。

それは先程までロッカーのところにいた沙耶香である。そのロッカーが並べられ緑の床のその部屋の中を静かに動いてやって来たのである。

「今からね」

「今から・・・まさか」

「そのまさかよ。今から貴女は私のもの」

後ろにいたもう一人の沙耶香は何処かに消えていた。見れば沙耶香自身の影の中に消えていつている。そうして消えてしまったのである。

「私のね」

「まさか貴女は」

「そうよ。そうしたことを楽しむ人間なのよ」

目を細めさせていた。その妖しい目で話すのだった。

「それをね」

「それは・・・」

「嫌だというのかしら」

彼女の言葉は既に見抜いていた。

「まさかとは思うけれど」

「私はそんなことは」

「知らなければ知ればいいのよ」

知らないものを拒もうとしていることもわかっていた。だからこ
うも言ってみせたのだ。

「それだけなのよ」

「それだけ・・・」

「そうよ。それだけよ」

彼女の目を覗き込んだの言葉だ。そうして。

「そして今は誰もここにはいないわ」

「私達だけですわ」

「ええ。だから」

そして次の言葉は。

「楽しみましょう」

「・・・・・・はい」

彼女は沙耶香の言葉にこくりと頷いた。それで全ては決まった。

沙耶香はここでも女性を楽しんだ。そしてその後で更衣室の中で服を調べていた。

相手の美女は水着のままだった。だがあられもない部分をはだけさせている。そのうえで沙耶香の側に座り込んでいた。

沙耶香はその美女にだ。艶やかな笑みを含んだ言葉をかけた。

「どうだったかしら」

「これが女の人ですか」

「男は知ってるわよね」

「はい・・・・・・」

赤らめさせた顔でこくりと頷いて答えた。

「それは」

「どちらがいいかしら」

あらためて彼女に問うのだった。

第二十四章

「男とどちらが」

「それは」

「そうね。それは言えないわね」

「どちらがどちらとは」

「男のそれとはまた違う快樂なのよ」

「そうだと話すのだった。」

「これはね」

「そうですね。また別の快樂なのです」

「その二つを知ってこそ本物なのよ」

その美女の方を振り向く。ようやく水着を元に戻したところだった。だがその顔はまだ赤らんでいて放心しているものが残っているのがわかる。

「それでね」

「本物ですか」

「そうよ。本物よ」

沙耶香はまた話した。

「これでわかったわね」

「また。してくれますか」

「あら、はじめてなのに」

それを見てまた話す沙耶香だった。

「もうなのかしら」

「こんなにいいものだとは思いませんでした」

「そうね。けれど何時会えるかはわからないわよ」

今はこう言うだけなのだった。

「貴女にとっては残念かも知れないけれど」

「行きずりですか」

「違うわ。そうね」

ここからはわざと言葉を選んだ。そうして出した言葉は。

「偶然的恋愛よ」

「それですか」

「そうよ。それよ」

それだと言ってみせたのである。サルトルの言葉だ。なお彼はこれを口実にして浮気を楽しんだことでも知られている。それなりに人間味もある哲学者だったのだ。

「それだから」

「そうですか。それですか」

「だから」

そう話してみせたのだった。50

「また会った時にね」

「そうですか」

「ただね」

しかし沙耶香はここでも言うのだった。

「相手は私だけではないわよ」

「貴女だけではない……」

「女は星の数程いるわ」

まだうずくまっている彼女を見ながら笑みを浮かべていた。

「その美女達を貴女が抱けばいいのよ」

「それでいいんですね」

「そうよ。そうするといいわ」

こう言って彼女も誘うのだった。その妖の道である。

「わかったわね」

「はい、それでは」

「それじゃあ」

ここまで話すと沙耶香はプールを後にした。彼女にとっては心地よい朝の時間だった。

その心地よい朝の時間を過ごした後で。彼女はある場所に向かった。そこはロビーである。赤いビロードのペルシャ絨毯が敷かれ眩

い黄金の光を放つシャングリラがその黄金の部屋を照らし出している。彼女はそこの柔らかい紅のソファアーの一つに座り前にあるルネⅡマグリットのシュールリアリズムの絵画を見ながら煙草に火を点けた。その彼女の後ろから声がしてきたのであった。

「如何ですか？」

「楽しいわ」

煙草を吸いながらその声に応えた。

「まずは二つよ」

「もう二つですか」

「楽な仕事からやらせてもらったわ」

「最初のものはそうは思えませんが」

「私にとっては楽なものだったわ」

煙草の煙を口からふう、と出しながらの言葉であった。

「最初のものもね」

「左様ですか」

「あと二つね」

沙耶香はまた言った。

第二十五章

「それが終われば今回の仕事は終わりね」

「はい、その通りです」

「さて、それじゃあ」

煙草をまた口に入れた。

「貴方はこれからどうするのかしら」

「どうするありません」

声が微笑んでいた。

「それについては」

「どうもしないというのかしら」

「はい、特に」

こう沙耶香に対して述べるのであった。

「私もまたここで楽しんでいますので」

「そうなの。確かにここはね」

「素晴らしい船ですね」

「船は好きよ」

これは本音である。沙耶香は船旅というものが好きだ。そして船の中自体を好むのだ。オペラハウスにホテル、夜の街に宮殿、それと娼館。彼女の愛する場所は絢爛と退廃の世界なのだ。

「特にこの船はね」

「クイーンⅡエリザベス二世も超えていますね」

「そうね。あの船もいいけれど」

口元に笑みが浮かんでいた。

「この船はさらにいいわね」

「贅を尽くしましたので」

「日本もこういう船を造られるようになったということね」

「左様です」

「いいと思うわ。私は贅沢が好きだし」

絢爛を愛するが故である。

「それでね」

「御気に召されたようで何よりです」

声もまた微笑んで満足しているものだった。

「お仕事ですからどうかと思っただのですが」

「生憎だけれど仕事は楽しむ主義なの」

こう答える沙耶香だった。

「そちらもね」

「左様ですか」

「人生は楽しむものよね」

そしてこんなことも言うのだった。

「だからよ」

「だからですか」

「そうよ。だからよ」

沙耶香の言葉は続く。

「だから仕事もね。楽しむ主義なのよ」

「そういうことなのですね」

「ええ。それで」

「それで？」

「今日のうちに終わるわよ」

その仕事の話であった。

「もうね」

「早いですね。もうですか」

「仕事は楽しんで早く終わらせる主義なのよ」

仕事についてプラスアルファであった。

「それでなのよ」

「ポリシーには五月蠅いのですね」

「ポリシーというよりは」

「それよりは？」

「美学よ」

それだというのだった。沙耶香が言えば不思議と絵になる言葉であつた。

「言うならばね」

「美学ですか」

「ええ、美学よ」

また話すのだった。

「そういうことだから」

「わかりました。それではです」

「ええ」

「お仕事が終わりましたら」

もう話はそこに至っていた。その話をするのだった。

「青は御自由に」

「ここでの遊びを楽しんでいいということね」

「お酒を楽しまれるのも美女を楽しまれるのも」

「もうどちらも楽しんでるわ」

「ほう」

それを聞いてであつた。背中の声が興味深そうに述べてきた。

第二十六章

「それですか」

「楽しむといったわね。仕事も」

「確かにそうですが」

「この船は美酒が揃っているわ」

既にワインを心ゆくまで楽しんでいる。沙耶香にとってワインは
靈薬と同じ様なものである。彼女に深い潤いを与えるものなのだ。

「それに名花もね」

「やれやれ。もうどちらも楽しまれているとは」

「そういうことだから。仕事が終われば」

「後は御自由に」

「今まで通りにさせてもらうわ」

しかし沙耶香の返答はこうしたものだった。

「それでいいかしら」

「お仕事を終えて下さればそれでいいので」

彼が言うのはそれだけだった。それから先は言わないのだった。

「それだけですから」

「わかったわ。それじゃあ」

「御願います。では」

こんなことを話してであった。彼等は別れた。沙耶香は席を立ち
そのうえでレストランに入った。彼女のテーブルに着いて頼むメニ
ューは。

「ハンバーグがいいわね」

「ハンバーグですか」

「ビスマルクの様にね」

そうしたハンバーグだというのである。

「大きさは五百グラムで」

「大きさはそれですね」

「そして上に目玉焼きを置いて」

「こうも言い加えるのだった。」

「それで御願ひするわ」

「それをビスマルクのものと言われるとは」

それを言われたボーイはだ。微笑んで彼女に言ってみせたのだった。

「お見事です」

「お世辞はいいわよ」

「いえ。本当に御存知なのですね」

「何がかしら」

「料理というものが」

まさにそれ自体がというのである。

「では前菜は」

「生牡蠣がいいわ」

それだというのだった。

「そうね。それは」

「百個ですね」

「流石に百七十五個は辛いわね」

ビスマルクは大男であり大食漢でもあった。ある店で生牡蠣を百七十五個食べたという記録が残っている。他にはゆで卵を十個以上食べたという話もある。

「だから」

「百個で、ですね」

「それだけにしておくわ。後は」

「他は」

「ポテトサラダね」

サラダはそれだというのである。

「スープはコンソメで。パンでね」

「畏まりました」

「ワインは白と赤を一本ずつ御願ひするわ」

それはどちらもだというのだ。

「白を先に出してくれるかしら」

「生牡蠣の為に」

「そうよ。それで御願いな」

「デザートは」

「ザッハトルテを」

それをだというのだ。

「御願いするわ」

「では」

こうしてメニューを頼み贅沢で量もある昼食を楽しむのだった。女ではあるが見事な美食家であり健啖家であった。そして食べ終えてレストランを出ると少し船の中を歩いて。そのうえである客室の前に来たのであった。

その扉に触れると扉は自然に開いた。下手の中はこの船の中ではエコノミーと言ってもいい部屋だった。それでも豪華な絨毯に敷かれそのうえで立派なテーブルや椅子が見られる。そうした部屋であった。

その白いベッドの中にだ。一人の若い美女が眠っていた。長い黒髪でありそして白いガウンを着てベッドの中にいた。だがとても辛そうな顔をしており呻き声さえあげていた。

沙耶香はその彼女のところに来てだ。静かに右手をあげて親指と人差し指を鳴らした。するとそれだけで彼女は目を覚ましたのであった。

第二十七章

美女は沙耶香を見てだ。ふと気付いた様にして問うた。

「貴女は？」

「通りすがりの客よ」

ベッドの中の彼女をその切れ長の黒い目で見ながらの言葉である。

「ただのね」

「通りすがりですか」

「そうよ。それで貴女はどうなのかしら」

彼女に顔を向けての言葉だった。

「貴女は」

「私は、ですか」

「夢を見ていたのね」

今度は彼女の中へ向けた言葉だった。

「そうね。それも恐ろしい胸を」

「それもおわかりなのですか」

「わかるわ。そして」

沙耶香は彼女をその切れ長の黒い目で見ながらだ。さらに言ってみせたのだった。言葉は自然と出ている。選ぶ必要はなかった。

「貴女の中には新しい命もあるわね」

彼女はベッドの中から暫く沙耶香を見ていた。そうしてそのうえで静かに沙耶香から顔をそむけてだった。小さな声で答えた。

「・・・はい」

「誰の子供かは言うまでもないわね」

「主人の子供です」

今度は沙耶香に顔を向けての言葉だった。

「それは間違いありません」

「それもわかるわ」

「ただ」

しかしだった。彼女はここでその沙耶香が見た夢のことを話すのだった。

「貴女のその御主人とも子供も貴女自身も」

「何故でしょうか」

「こう言うのだった。」

「夢の中でいつも私も赤ちゃんも狙われます」

「そうね。いつもね」

「それは何故でしょうか」

「相手は貴女にはわからないものよ」

それは彼女にはわかるものではないというのである。

「残念だけれどね」

「そうなのですか」

「ただ」

「ただ？」

「悪夢は終わるものよ」

沙耶香はこう彼女に告げた。

「必ずね」

「終わるのですね」

「今終わるわ」

また彼女に対して告げたのであった。

「今ね」

「今ですか」

「目を閉じなさい」

彼女に静かに命じる様に告げた。

「そしてそのまま眠るのよ」

「けれど今起きたばかりで」

「いえ、眠れるわ」

それが最初から決まっている様な言葉であった。その言葉を彼女にかける。すると彼女は沙耶香に言われるままにゆっくりと目を閉じた。するとであった。

そのまま眠ったのだった。そして彼女が完全に眠るとであつた。舞台は何時の間にか変わっていた、客船の部屋の中から得たいの知れない西洋風の宮殿の中になっていた。左右に無数の鏡が並んで互いに映し出し合い無数の世界を構成している。沙耶香はその中に立っていた。

黒い壁や絹の白いカーテン、そして立派な窓を見回しているとであつた。前から彼女が駆けて来た。何かから逃れる様に必死の顔である。そしてその後ろから。

悪魔の様な仮面を着けた女が迫って来る。黒い喪服を着ておりその両手には死神の大鎌がある。その女が彼女に襲い掛かろうとしていた。

そのまま鎌で彼女の腹を後ろから斬ろうとする。今まさに斬ろうとするその時だった。

「待ってもらわ」

沙耶香が前に出た。そのうえで鎌に己の右手の人差し指から放った水晶を思わせる水玉をかけた。すると鎌は水玉が触れたその部分から凍っていき。忽ちのうちに砕けてしまったのである。鏡の中にその有様が映っていた。

第二十八章

「鎌が!？」

「夢の中では魔術はとりわけ効果を強くする場合があるわ」

沙耶香はその仮面の女に告げた。

「それが今というわけよ」

「何故こんな」

「何故もこんなもないわ」

言いながらであった。彼女の後ろに来た。まるで影の様に客室の中で会っていたその彼女の後ろに来ていた。彼女はその間に向こうの部屋への扉に入りそのまま姿を消してしまった。

「あっ、私の・・・・・・」

「私ではないわ」

また言う沙耶香であった。

「貴女はここにいてはいけないのよ」

「いえ、私は」

「貴女のいるべき世界はここではないのよ」

その仮面の女への言葉を出し続ける。

「そう、ここではないのよ」

「では一体何処が」

「仮面を外すのよ」

沙耶香はその仮面を一瞥させ右手を下から上に一閃させた。するとそこから一輪の黒薔薇が放たれ仮面の額を撃った。するとそれにより仮面は縦に真っ二つに割れたのであった。

「あっ・・・・・・」

「素顔を出して」

仮面が割れるとだった。そこからは豊かな黒髪に大きな切れ長めの二重の流麗な目を持っておりその右目の目尻に泣き黒子がある女が出て来た。妖艶かつ優しげな顔をしている。その顔をした美女の

顔が出て来たのだ。見ればその顔は客船の彼女に非常に似ている。

左右の鏡にもその美しい横顔が一斉に現われた。

「綺麗な顔ね」

「私は……」

「あの人は幸せにやっていたいかなければならないのよ」

沙耶香はその女性を見ながら静かに告げた。

「だから貴女はもうあの人のことは忘れて」

「そして」

「貴女のいるべき世界に行きなさい。そう」

言いながらであった。そつと彼女に歩み寄りその唇に接吻をした。すると彼女はその目から少しずつ涙を流し。その涙とともに姿を消していったのであった。

彼女が消えると共に宮殿から船室に戻った。沙耶香はその手に一枚の写真を持っていた。そこにはあの美女が美しい赤いドレスを着てその中にいた。

丁度彼女もベッドの中から目覚めたところだった。沙耶香はその写真を彼女に見せてそのうえで尋ねるのだった。

「この女の人は？」

「姉さんです」

「そうだったの」

「よく似てると思われますか？」

「ええ、とてもね」

こう彼女に答えたのだった。

「まるでもう一人の貴女みたいに」

「主人の前の妻でした」

彼女はこのことを沙耶香に語るのだった。

「ですが」

「亡くなられて貴女が、だったのね」

「古風な話ですけれど」

「けれどある話ね」

「はい……」

配偶者が死ねばその次の夫や妻にその配偶者の兄弟姉妹になるということは昔よくあったことだ。彼女はそうして夫と結ばれたというのである。

「姉は主人をととても愛していました。私が主人を愛するのと同じ位」
「わかったわ」

沙耶香は彼女の言葉を聞いて小さく頷いてみせた。

「事情は」

「左様ですか」

「けれどこれで終わったわ」

「全てですね」

「ええ、安心していいわ」

こう彼女に告げるのだった。

「お姉さんのことは忘れなさい」

「全てですか」

「いい思い出だけ覚えていればいいのよ」

これが彼女への沙耶香の言葉であった。

「それだけね」

「ではそれ以外は」

「忘れなさい」

またこの言葉を出してみせたのである。

第二十九章

「いいわね」

「いいことだけをですか」

「そうよ、死んだ人のことはいいいことだけを思い出す」
ベッドに寝たままの彼女を静かに見ながらであった。

「それだけでいいのよ」

「わかりました。それでは」

「そろそろね」

沙耶香は部屋の扉に顔を向けた。そのダークブラウンの扉をである。

「御主人が帰って来られるわね、この部屋に」

「そうですね。少し外の風にあたりに行っただけですの」

「では私はこれで」

彼女に背を向けての言葉だった。

「帰らせてもらうわ」

「お名前は」

「名前？」

「ええ。貴女のお名前は」

それを沙耶香に問うのだった。彼女のその名前をである。

「何と仰るのですか？」

「名前。聞いて覚えてくれても忘れてくれてもどちらでもいいけれど」

「何と仰るのですか？」

「松本よ」

まずは姓から名乗るのだった。

「松本沙耶香。それが私の名前よ」

「そうですね。松本さんと仰るのですね」

「そう。機会があったらまた会いましょう」

扉に身体を向けている。今まさに部屋から去ろうというのだ。

「またね」

「ええ、有り難うございました」

彼女の顔は微笑んでいた。そのうえでの言葉だった。

「私も赤ちゃんも。そして姉さんまで救って頂いて」

「仕事だから当然よ」

これが沙耶香の返答だった。

「だからしたまですよ」

「仕事？」

「これは私の話よ」

このことについては語らなかった。当然といえば当然だがこれは話してもわからないことだと思ったからである。あくまで沙耶香が住んでいるその世界だけの話だからだ。

「だから。またね」

「はい。機会があればまた」

「会いましょう」

こう告げて扉を開けて部屋を後にする。その扉を彼女の夫が開けたのは暫く後になってからだ。沙耶香はまた一つ仕事を終えろと今度は船の後ろの方に出た。そこでテーブルに座り演奏されるオーケストラを楽しんでいた。

曲はベルリオーズだった。幻想交響曲である。ベルリオーズが自殺を試みその昏睡状態の中で見たものを音楽にしたと言われている。そうした曲である。

その曲を聴いているとだった。不意に曲とは不釣り合いの無粋な音が聞こえてきた。それは人の下劣な叫びだった。

「だから俺は違うって言ってるだろうがよ」

「そんな格好で信じられるものか」

「そうよ」

「あんたに決まってるわ」

「俺じゃない」

見れば上半身は正装だが何と下半身は丸裸の男が喚いていた。あの鶏声であった。

「俺がやったっていう証拠はあるのか」

悪人が自白する時に常に言う言葉だった。しかもかなり下劣な部類の悪人である。

「ないだろうがよ」

「その丸出しの下半身で何を言ってるんだ」

「そうよ、あんたしかいないわ」

「御前しかいない」

「何かしら、あれは」

沙耶香もその光景を見て不快さを見せて言うのだった。

「このホテルはストリップショーもやっているのかしら」

こう丁度傍に来たウェイトレスに尋ねるのだった。

「それも男がベルリオーズをバックにして。独創的だけれど到底いい趣味とは言えないわね」

「いえ、そんなことはありません」

ウェイトレスは生真面目そのものの調子で彼女の言葉に応えた。

そのうえでの言葉だった。

「あれはです」

「あれは？」

「何かウェイトレスやメイドの更衣室のロッカーに忍び込んでいたそうです」

「のぞきというわけね」

「はい、そして下半身を丸出しにして。その」

「下劣ね」

一言であった。

第三十章

「そうとしか言いようがないわね」

「今警察を呼びました」

対応は早かった。

「痴漢の現行犯で今から」

「それで終わりなのね」

「はい。更衣室からここまで逃げてきましたが」

「けれど終わりね。所詮は」

「所詮は？」

「下劣な人間の末路は下劣なものよ」

冷たい言葉であった。そこにはそれ以外に見られるものは皆無であつた。

「結局のところはね」

「そうですか」

「そうよ。それにしても」

ここで沙耶香は言葉を代えた。既に鶏声は下半身丸出しのまま私服や制服の警官達に手錠をかけられている。翌日には破廉恥犯として新聞やテレビでのトップスターとなることは間違いなかった。とりわけネットではだ。これまで上から目線で言つて貶めていた人間が言われて貶められる立場になるのである。まさに因果応報である。沙耶香はその下劣漢から目を離した。そのうえでウェイトレスに話すのだった。

「オーケストラだけれど」

「如何でしょうか」

「いいわ」

今度の声は満足したものが入っていた。

「満足できるものだわ」

「左様ですか」

「全体にレベルが高いわね」

聴きながらの言葉だ。目は真剣なものであった。

「指揮に至るまで」

「世界的に有名な指揮者を呼んでいますので」

「フルトヴェングラーの流れね」

沙耶香はこの名前も出した。二十世紀中期のドイツを代表する指揮者でありベートーベンやワーグナーにおいて不滅の名前を残した。ロマン派を集大成した人物としても知られている。あのヒトラーにもその音楽を愛された人物である。彼自身はナチスを嫌悪してはいたが。

「これは」

「そこまでわかりなのですか」

「わかるわ。音楽は好きだから」

声にある満足したものはそのままであった。

「だからね」

「まさかとは思いますが音楽家か何かで」

「違うわ。ただ」

「ただ？」

「芸術は愛しているわ」

これもまた沙耶香の言葉だった。

「芸術はね」

「そうなのですか」

「芸術は華よ」

こうまで言ってみせた。

「そしてその場を汚す様な人間はね」

「先程のですか」

「その下劣さに相応しい末路が待っているものなのよ」

それが今だというのである。沙耶香は鶏声には何処までも辛辣であった。そしてその辛辣極まる言葉をさらに出し続けるのであった。「そして」

「そして？」

「既に多くの人に携帯で取られているわね」

「はい、そうですね」

実際にその更衣室ののぞきから逃げ出して下半身丸出しのままで連行されていく鶏声の醜態は多くの乗客達に携帯で撮られていた。そしてそれがどうなるかであった。

「ああして撮っていれば」

「すぐにブログ等に載せられますね」

「便利な世の中になったわ」

冷酷な笑みと共の言葉であった。

「ジャーナリズムではなく一人一人が全世界に発信できるのだから」
「全世界にですわね」

「ええ、全世界にね」

これがネットというものである。一人が巨大マスコミを凌駕しかねない情報を提供することも可能なのである。これは非常に大きなことである。

「あの鶏声は新聞記者だったわね」

「はい、ジャーナリストでした」
言葉は既に過去形である。

「ある国立大学を出てそうして」
「一流大学を出て新聞記者になってコネでジャーナリストになっていく」

所謂マスコミ人の典型である。

「けれどそれももう終わりね」

「これで完全に、ですわね」

「ええ、終わったわ」

冷酷が冷徹に変わっていた。

第三十一章

「完全にね」

「それでは今からは」

「そうね。音楽だけでいいわ」

他には何も頼まないというのである。

「それだけでね」

「他のものは」

「今はいいわ。夕食の時にはワインが欲しいけれど」

それでも今はいいいというのである。ただ音楽を楽しむだけの沙耶香だった。

そしてそれが終わり夕食はだ。テーブルに着いて頼むのだった。自分の席に座ったままで優雅にあのボーイに話す。そのメニューは。

「鴨がいいわね」

「鴨ですか」

「鴨のオリーブ煮をもらうわ」

「メインはそれですね」

「あとサラダは海草サラダを」

そしてサラダはそれをだというのだ。

「スープはシーフードスープで」

「そしてオードブルは」

「サーデインがいいわね」

鰯がいいというのだ。実は沙耶香はそうした魚もよく食べる。嫌いなものは特になく何でも食べるのが彼女なのである。

「そして野菜も欲しいわね」

「ボイルしたもので宜しいでしょうか」

「それで御願いますわ。パンもね」

「パンはどれを」

「そうね。フランス風がいいわね」
それを所望だという。そしてだ。

「あとデザートは」

「どうされますか？」

「フルーツがいいわ」

今はそれをだというのだ。

「フルーツの盛り合わせをね」

「そしてワインは」

「シャンベルタンを」

ワインはそれなのだった。

「二本ね」

「はい、それでは」

「二本頼むわね」

「わかりました。では」

「さて」

ここまで話してであった。沙耶香はメニューが来るのを待った。
そのうえで夕食を食べワインを飲み終えてからだ。静かに席を立つ
て言うのだった。

「さて、それでは」

「それでは？」

「最後の仕事ね」

こうボーイに話すのだった。

「これから」

「最後とは？」

「こちらの都合よ。それではね」

「はい、有り難うございました」

ボーイは恭しく一礼してそのうえで沙耶香を見送った。彼女はそ
のまま部屋を後にしてであった。その足である場所に向かった。そ
こは。

「さて」

船長室であった。その扉の前にいた。

扉に手を触れると自然に開いた。そこに入ると一人の黒と金の服を着た男がソファ―にうづくまる様にして座り込んでいた。部屋の中は豪華なものであり沙耶香がいる客室と比べても遜色はない。しかしかった。

その部屋の中にいながらだ。彼は沈んでいた。

それを見てだ。沙耶香は言うのであった。

「どうしたのかしら」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「悩んでいるのね」

返答はないがこう述べるのだった。

「貴方は。そうね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やはり返答はない。だが彼女は静かに言うのであった。

「仕事だから。はじめさせてもらうわ」

右手の親指と人差し指を鳴らすとだった。それで部屋が一転した。絹のカーテンに豪華なギリシア風の彫刻がある部屋の中から荒涼とした大地に立っていた。そしてそこにあの船長が立っている。しかしその周りには。

第三十二章

無数の悪鬼達がいた。漆黒の影を思わせる姿をしておりそれが船長の周りを動き回っている。そのうえで何かを叫んでいた。

「御前の娘はだ」

「御前の娘ではない」

「他の男の娘だ」

こんなことを言っているのだ。

「只の連れ子ではないか」

「それが何故実の子なのだ」

「どういうのだ？それは」

船長は項垂れたまま彼等に問うた。

「あの娘は俺の」

「いや、違う」

「違うぞ」

こう船長に言ってきた。

「それは全く違う」

「血のつながりがなければだ」

「何にもなりはしない」

「所詮は血だ」

「血故にだ」

悪鬼達は言い続けてきていた。

「御前はあの娘の父親にはなれない」

「御前がどれだけ愛そうともだ」

「実際にだ」

鬼達がここで言うのであった。不意に異変が起こった。

何と船長の前に一人の白い服を着た楚々とした奇麗な少女が現われてきたのだ。少女は船長の前に無言で立っている。

「絵里奈・・・・・・・・」

「御前の娘だな」

「しかし御前の娘ではない」

「それを言っておく」

悪鬼達はまた船長に言ってきた。

「この娘も御前のことを愛してはいない」

「愛する筈がない」

「その通りだ」

そのことを何度も言ってみせるのである。船長の周りを跳ね回りで影の様に動かない。しかし悪鬼達はその娘を指差して言うのだ。あった。

そしてその中でだ。娘はただ無言で立っているだけだった。まるで影の様に動かない。しかし悪鬼達はその娘を指差して言うのだ。

「所詮は連れ子」

「御前を愛する筈がない」

「それでもなのか」

「それがどうかしたのかしら」

ここで、であった。沙耶香は彼等の前に来てだ。そうして一言言うのだった。悪鬼達も彼女に顔を向けて動きを止めていた。

そのうえでだ。今度は沙耶香の周りに来て問うのだった。また口々にだ。

「何だ御前は」

「何者だ？」

「見ない顔だが」

「当然よ。私は貴方達とは違う世界にいるのだから」
悠然としたままで言葉を返す沙耶香だった。

「それでどうして貴方達が私を知ることになるのかしら」

「ふん、貴様の言っていることは矛盾しているな」

「それはだ」

沙耶香の言葉尻を捉えての言葉だった。

「我等が貴様の世界に来ればそれでだ」

「貴様を知ることができるではないか」

「それで何故だ」

「そう言うのだ」

「言葉のあやよ」

こう返すだけの沙耶香だった。まるでそれが何でもない様にだ。
こう言ってみせてそれで終わらせたのであった。

「さて、それでは」

「それではだと？」

「どうするつもりだ？ 一体」

「まさかと思うが」

「我等とか」

「そうね。面白いわね」

沙耶香はその悠然とした笑みのままで述べてだった。

第三十三章

「それも」

「ならば。容赦はしない」

「死んでもらうぞ」

「その魂喰らってやる」

「何一つとして残すつもりはない」

こう言っただけであった。沙耶香に襲い掛かろうとする。しかし彼女は一步も動かずにであった。ただ薄く笑っただけで。

その両目が紅く光った。その瞬間だった。

悪鬼達が全て凍ってしまった。まるで水晶の中に収められたかのようにその中に閉じ込められてだ。次の瞬間には氷ごと砕け散ってしまったのだった。

「な、何っ!？」

「まさか」

「これで終わりだということのか!？」

「そうよ、終わりよ」

沙耶香は悠然として述べるのだった。その砕け散り最後の力で声だけを出す彼等に対してだ。

「これでね」

「まさか我等を瞬時にして凍らせて砕くとは」

「恐ろしい女だ」

「貴様、一体何者だ」

「名前ね」

それを問われるのであった。沙耶香は悠然として述べた。その名をだ。

「沙耶香」

「沙耶香だと!？」

「まさか」

「そう。松本沙耶香」

その名前を語ってみせたのだ。

「この名前は知っているわね」

「人間の世界でも有数の魔術師の中に」

「漆黒の服を着た女がいるというが」

「それが貴様だったのか」

「有名なのはいいことね」

沙耶香もそれを聞いて艶然とした笑みを浮かべて返してみせた。

「まさか魔界の住人にも知られているなんて」

「それが貴様だったのか」

「松本沙耶香だったのか」

「ぬかった……」

「貴方達の失態ではないわ」

沙耶香はそれは否定してみせた。

「そうではなくて」

「そうではなく」

「では一体何だというのだ」

「それでは」

悪鬼達の声が少しずつ消えていっていた。その全てが消え失せようとしている何よりの証であった。沙耶香も耳でそれを確かめていた。

そうしてだ。沙耶香は言うのだった。

「私が凄かっただけよ」

「貴様がか」

「それでだというのか」

「おのれ……」

「安心して事切れなさい」

沙耶香も彼等に最後の言葉を告げる。

「そのままね」

こうして悪鬼達の全てが消え去るのを感じ取っていた。沙耶香は

そのうえで船長に歩み寄りだ。彼に対して静かに言うのだった。

「それだけれど」

「貴女は」

「少なくとも鬼ではないわ」

口元だけで笑みを浮かべさせて告げるのだった。

「だから安心してもらっていいわ」

「鬼ではない」

「ええ。人間よ」

まさにそれだというのだ。人間だとだ。

「人間よ。そして」

「そして？」

「前を見るといいわ」

こう彼に言ってみせた。

「前をね」

「前を」

「誰がいるのかしら」

前を見るように告げてみせてからの言葉だった。

「貴方の目の前には誰が」

「娘です」

彼の返答は一言であった。

第三十四章

「私の娘がいます」

「そうね。いるわね」

沙耶香も彼の言葉に頷いてみせた。

「貴方の娘さんが」

「ですが」

しかしであった。彼は俯いて言うのであった。

「それは」

「貴方とは血が繋がっていないというのね」

「はい」

こう言うのであった。

「妻の連れ子です」

「そうだというのね」

「そうです。それは事実です」

このことを認めるのだった。そうせざるを得ないこともあった。そうしてだ。船長はさらに言うのであった。

「しかし私はです」

「娘さんをどう思ってるのかしら」

「愛しています」

確かな声での言葉だった。

「娘としても」

「そうね。愛しているのね」

「その通りです。ですが娘は」

「娘さんがどう思っているかがわからない」

「若しかして私を嫌っているのでは」

こう考えているのだった。

「やはり。私が血の繋がっていない相手だから」

「そう思うのね」

「それはどうなのでしょうか」

このことをまた言うのであった。

「娘は。果たして」

「知りたいのはそのことね」

沙耶香は彼のその言葉を確かめた。

「そのことなのね」

「はい」

そうだと答えた。

「その通りです」

「わかったわ。それじゃあね」

「それでは？」

「顔をあげればいいわ」

こう彼に告げるのだった。

「顔をね」

「顔をですか」

「そうよ。あげればいいのよ」

そうしろというのだった。具体的にはそうだった。

「顔をね。そして見てみればいいわ」

「それで全てがわかるのですね」

「そうよ」

その通りだという。告げる言葉はそれだけだった。

そうしてだ。さらに言ってみせたのであった。

「それじゃあ。いいわね」

「はい、それでは」

こうしてであった。船長はその顔をあげた。すると前にいる美しい少女がだ。にこりと笑って彼に歩み寄ってきた。そのうえで何時の間にかその手に持っている花束を差し出してきて彼に手渡したのだ。そのうえでの言葉であった。

「いつも有り難う、お父さん」

「お父さん……」

「これが娘さんの返答よ」

また言う沙耶香であった。

「これがね」

「そうだったのですか」

「愛すれば愛されるようになるわ」

沙耶香はその二人に対しての言葉になっていた。

「そういうことよ」

「愛すればですか」

「貴方は娘さんに純粋な愛情を持っているわ」
まさにそうだというのである。

「父親としてね」

「私のですか」

「だから。娘さんもね」

「私を愛してくれているのですね」

「その通りよ。それが純粋な愛ならば」

沙耶香はまたこの言葉を出して話してみせた。

第三十五章

「必ず通じるものだから」

「だからですか」

「案ずることはないわ。娘さんは貴方を父親として愛してくれているわ」

「血がつながっていなくともですね」

「血は確かに濃いわ」

沙耶香もそれは認めた。だがそれだけではないともいうのであった。

「けれどね」

「けれどですか」

「そうよ。それを確かなものにするのは愛よ」

まさにそれによってだというのだ。いささか沙耶香らしくない言葉であるのは自分自身も自覚していたがそれでも言ってみせたのである。

「それがあればこそよ」

「そういうことなのですか」

「これでわかったわね」

沙耶香は船長に告げた。

「本当のことが」

「はい、確かに」

「それではね」

ここまで話すと踵を返すのだった。そのうえで幸せの中にいる二人を後にして去った。沙耶香が戻ったのは元の船の中だった。船長は上機嫌の顔で部屋を出てそのうえで艦橋に向かっていた。

その日の夜。沙耶香はポーカーをしていた。あのルーレット等がある遊戯場でそれをしながらだ。優雅に笑っていた。

今は一人の紳士と勝負をしている。相手がストレートを出すので

あった。彼女はフラッシュを出してみせた。明らかに彼女の勝ちであつた。

そのまま勝負を続けていたがやがて席を立った。するとその横にあの男が来たのであつた。彼は沙耶香の横でこう囁いてきた。

「お疲れ様でした」

「これで終わりね」

「はい、全て」

これが返答だつた。

「有り難うございました」

「四つの仕事が全て終わったわね」

「これで四人共憂いなく過ごせます」

「ええ。ただ」

「ただ？」

「一つ納得できないことがあるわ」

こう言うのであつた。沙耶香は今場の端に立っている。彼はその脇に来て話しているのだ。

「一つね」

「といますと？」

「四人共貴方の家の人だったわね」

言うのはこのことだつた。

「そうね。嘘だとは言わせないわよ」

「お気付きでしたか、それは」

「気付かない筈もないわ。何故ならね」

「気配ですか」

「それでわかつたのよ。貴方と同じ気配」

それでだというのである。

「血のね」

「それでなのですか」

「そうよ。つまりは」

「ああ、実はですね」

彼の方からの言葉だった。

「私は確かに一族の者ですが」

「傍流とでもいうのかしら」

「その通りです。私は本家筋ではありません。御当主様の執事長でありますが」

「執事長ね」

「そしてです」

そのまま沙耶香に対して語ってきた。

第三十六章

「その立場からあの方々のお悩みを解消して差し上げたのです」

「まずあの奥さんの事故のことで悩んでいた人は」

「御当主様の次男様です」

「そうだというのである。」

「次男様であります」

「次男ね」

「そうです。御兄弟では末っ子の方です」

「兄弟は四人ね」

「それもおわかりですね」

「最初は五人だった」

「沙耶香はこうも言ってみせた。」

「けれど一人死んでしまったのね」

「その通りです」

「あの。悪夢にうなされていた奥さんが次女さんね」

「正式には三女になります」

「彼女はもう安心して旅立ったわよ」

「こう彼に対して語ってみせた。」

「落ち着いてね」

「それにつきましても有り難うございます」

「中には役得もあったし」

「不意に沙耶香の顔に笑みが宿った。」

「あの女医さん。長女さんね」

「左様です」

「彼女の悩みも消してあげたわ」

「あの方は御主人との夜のことで悩んでおられました」

「そうした悩みだったというのである。悩みは人に言えるものばかりでもなければ昼の世界のものだけでもないのだ。夜の世界にも存

在するものなのだ。

「ですから。それも貴女にと」

「いい思いをさせてもらったわ」

これがそのことに対する沙耶香の返答だった。

「実にね」

「それは何よりで」

「そして最後は」

話は終わりに近付いてきていた。

「あの船長さんね」

「御長男様ですね」

「危ないところだったわね」

ここでこんなことを言ったのだった。

「あのままだとね。彼は」

「悪鬼達に飲み込まれていましたか」

「心をね。それは他の三人も同じだけれど」

彼は特にというのである。

「本当に危ないところだったわ」

「左様でしたか」

「けれど。もう大丈夫よ」

言葉がすっとした笑みと共のものにもなった。

「これでね」

「あの方は奥様が若い頃に既に子供がおられました」

「その先の御主人がいなくなってのことね」

「はい、あの方と再婚されました」

この事情も話されるのだった。

「それによつてです」

「わかったわ。けれどももうあの親子は大丈夫よ」

沙耶香は笑って彼に話した。

「もうね。絆は確かなものになったわ」

「では全ては終わりましたね」

「ええ、全てが」

今の問いにも答えた。

「終わったわ」

「それでは。御礼は振り込んでおきますので」

「御願いますわ。仕事はこれで終わりね」

全て終わった。沙耶香はこのことも実感していた。そしてその実感の中でだ。落ち着いた言葉でこう述べたのであった。

「さて、後は」

「まだ船に残られますね」

「チェックインの数だけね」

残るというのであった。

「そうさせてもらうわ。それじゃあね」

「はい、それでは」

「また遊ばせてもらうわ」

こう言うのであった。バーのカウンターに向かった。そうしてそこで端麗なタキシードに身を包んだ背が高くショートヘアですらりとした身体つきの美女に声をかけるのであった。

「ねえ。これからだけれど」

「はい、これから」

「まずは飲みましょう」

最初に告げた言葉はこれだった。

「貴女の分は私が奢るわ」

「いえ、それは」

「遠慮することはないのよ。何故なら」

「何故なら？」

「私は貴女を見ている」

その目を覗き込んでいる。そのうえでの言葉であった。

「そして貴女もまた」

「私ですか」

「私を見るようになるわ」

沙耶香の目が琥珀色の輝きを見せた。その輝きの中での今の言葉だった。

「私をね」

「私をですか」

「だから。飲みましょう」

また告げるのであった。

「二人でね」

「ですが私は」

「いいのよ」

ここから先はあえて言わせなかった。沙耶香の方が上であった。

「だからね。飲みましょう」

「だからですか」

「夜はまだはじまったばかりよ」

もう妖艶な笑みを見せていた。

「だからね。これからだから」

「それでは」

沙耶香はそのまま彼女と飲み彼女の仕事の時間が終わると静かに自分の部屋に連れて行った。彼はそんな沙耶香を見て言うのであった。

「やれやれですね」

苦笑いと呆れが入っている言葉であった。肩もすくめさせている。

「そちらについては相変わらずですか」

「では今からね」

「はい・・・」

バーテンの彼女は既に沙耶香に籠絡されていた。後はそのままベツドの中に。話を全て終わらせた沙耶香は彼女の楽しみを味わい続けるのだった。

2
0
1
0
•
3
•
2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1167k/>

黒魔術師松本沙耶香 客船篇

2010年10月8日12時35分発行